

「四国・住みたいまちに生きる」 ワーキンググループ 中間報告 2

四国研究プラットフォーム

事務局：産総研四国センター

四国の国立5大学、高知工科大学と
産総研との連携協力・推進協定

- 徳島大学
- 鳴門教育大学
- 香川大学
- 愛媛大学
- 高知大学
- 高知工科大学
- 産総研

平成26年3月
産業技術総合研究所四国センター

はじめに

平成24年度に引き続き、平成25年度も、四国の6大学と産総研との研究プラットフォームとして、「四国・住みたいまちに生きる」をテーマにワーキンググループで議論を行い、その議論の内容を本書（中間報告2）に、まとめさせていただきました。

本ワーキンググループは、多様な研究に取り組んでいる大学や研究機関の研究者とともに、「そもそもどういう社会を想定して、研究成果を使ってもらおうと思っているのか」という基本的な課題について議論する場としたい、という考えに基づいて開始したものです。また、科学技術の発展に対する素朴な信頼が、人々から失われつつあるのではないかと、という問題意識も、この主題を選択した理由となっていました。議論の方法としては、研究者が一人の個人としてどのような社会に住みたいか、という個別の議論を深めることで、普遍的な価値のあるものに到達できるのではないかと、という仮定の下で議論を重ね、平成24年度、中間報告1として、その討論の内容をまとめました。

平成25年度は、都市論と地域の産業創生という、本ワーキンググループのテーマに近い外部有識者を招き、ご講演と意見交換を行いました。西村幸夫教授（東京大学）には、様々な歴史を持った多くの日本の地方都市が、第二次世界大戦の空襲で破壊され、そして復興したのが今の姿であったことを教えていただき、大変興味深いものでした。また、松場登美所長（群言堂／株式会社石見銀山生活文化研究所）からは、天領であった石見銀山に、美しい自然と一体となった古民家を再生させて、多くの若者を魅了する企業や宿泊施設を経営されているお話を伺い、地域活性化の事例として多くの学ぶべきものがありました。

当初の目的が達成できたとは言い難いところですが、各大学から議論に参加いただいた先生方のご協力により、2年間、活動を続けることができました。まだまだ議論したいことは沢山ありますが、本年度をもって一応の区切りとさせていただきたいと思えます。

ワーキンググループに参加いただいた先生方にこの場をお借りして、御礼申し上げます。

平成26年3月
産業技術総合研究所四国センター
所長 松木 則夫

「四国・住みたいまちに生きる」WG中間報告2

四国の6大学と産業技術総合研究所（以下、「産総研」と略す）四国センターで構成する、四国研究プラットフォーム「四国・住みたいまちに生きる」ワーキンググループでは、平成24年度に3回検討会を開催し中間報告1として整理しました。

平成25年度については外部有識者を招聘し、①8月5日、②12月2日の2回開催しましたので、平成24年度同様、その内容を議事録的に整理するとともに、WG委員のメッセージを紹介して、中間報告2といたします。

「四国・住みたいまちに生きる」WGメンバー

徳島大学	田口太郎	大学院ソシオアーツアンドサイエンス研究部	准教授
	真田純子	大学院ソシオテクノサイエンス研究部	助教
鳴門教育大学	近森憲助	副学長（国際交流担当）・大学院学校教育研究科	教授
	金 貞均	大学院学校教育研究科	教授
香川大学	平尾智広	医学部 人間社会環境医学講座 公衆衛生学	教授
		医学部附属病院 副病院長	
愛媛大学	釜床美也子	工学部 安全システム建設工学科	助教
	小林真也	大学院理工学研究科電子情報工学専攻	教授
	吉井稔雄	大学院理工学研究科生産環境工学専攻	教授
高知大学	◇兵頭 知	大学院環境建設工学科交通工学・都市環境計画研究室	
	大嶋俊一郎	総合科学系黒潮圏科学部門	教授
	大槻知史	総合科学系地域協働教育学部門	准教授
	※石塚悟史	国際・地域連携センター	副センター長
高知工科大学	渡辺菊真	システム工学群	准教授
	中川善典	マネジメント学部	准教授
	※佐藤 暢	社会連携部	社会連携専門監
産総研	松木則夫	四国センター所長	
	三木啓司	上席イノベーションコーディネータ	
	安藤 淳	ナノエレクトロニクス研究部門	総括研究主幹
事務局	産総研四国センター	四国産学官連携センター	

◇吉井教授の代理出席 ※特別参加

「四国・住みたいまちに生きる」WG検討会開催状況等

1. 第4回WG検討会	5
・日時：平成25年8月5日（月）14：30～17：00	
・場所：サンポートホール高松 第51会議室	
・議事：①所長挨拶、出席者紹介	6
②講演	6
演題：都市の読み解き方から考えるまちづくり ～四国の県庁所在地を四都物語として、その面白さに迫る～	
講師：西村幸夫 東京大学教授・先端科学技術研究センター所長	
③質疑応答・意見交換	17
2. 第5回WG検討会	28
・日時：平成25年12月2日（月）14：00～16：45	
・場所：サンポートホール高松 第51会議室	
・議事：①所長挨拶、出席者紹介	29
②講演	29
演題：足元の宝を見つめて暮らしを楽しむ	
講師：松場登美 株式会社石見銀山生活文化研究所 代表取締役所長	
③質疑応答・意見交換	48
3. これまでのWG活動を振り返って～委員からのメッセージ～	66
(参考) 四国研究プラットフォームについて	77

備考) ①発言委員の敬称は省略しています。

②第4回検討会の資料1、3、5、6は西村教授提供。

資料2、4、6、8は国土地理院地図を利用。

③第5回検討会の資料1から資料57は松場所長提供。

地図は国土地理院地図を利用し部分的に作図。

第4回WG検討会

◆講師紹介：西村幸夫 氏

<プロフィール> 東京大学HPを参照

1952年、福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。

明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996.4～東京大学教授、2011.4～東京大学副学長（～2013.4）、2013.4～先端科学技術研究センター所長。この間アジア工科大学助教授（バンコク）、MIT 客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。

専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。工学博士。

<著書等>

『都市保全計画』（東大出版会、2004年）

『西村幸夫 風景論ノート』（鹿島出版会、2008年）

『観光まちづくり』（学芸出版社、2009年）

『まちの見方・調べ方』（朝倉書店、2010年）

『風景の思想』（編著・学芸出版社、2012年）など多数

<委員等>

「手づくり郷土賞」（国土交通大臣表彰）選考委員長

「美しい四国づくり委員会」（四国地方整備局）委員（2005年～2008年）など多数

1. 第4回WG検討会

①松木所長挨拶

今回ゲストをお招きしていますので、少し経緯も含めてご挨拶させていただきます。



産総研と四国の6大学では包括連携協定を結んでおり、研究プラットフォームとして次の研究をどうしたらよいか考えて行こうということで、「食と健康」をやってきましたが、昨年から「四国・住みたいまちに生きる」という検討を始めました。これはどういうことかと申しますと、いろんな先生方が集まって議論をしていただくので、研究成果を活かす場所としての四国というものを考えてみようということです。30年後とか50年後とかいろいろな考え方があるのですが、自分がそこに住んでいる意味も考えて、どういう社会に、どういう未来に自分の研究成果を活かしたいのか、簡単に言えば、どこに住んでどういう生活をしながら自分の研究をしていきたいかという大本のところを少し議論してみよう、少し青臭いところがありますが、いろいろ議論することによって、ある意味それを研究にフィードバックできたらいいかなと。住みたいということなので都市計画の話も出て、その方向に行くんですけど、それに限らずそれぞれ研究者の視点で、医療関係者やものづくりの立場から自分達の将来を住みたいという視点で個人の考え方を深掘りすることによって、一般化するような方法論がとれないかということで、少し漠たる内容ですが、議論させていただきました。

そして去年その中で、例えば、田舎に住み

たいのだけでも条件的に住めないよねという話も出ましたが、それを逆手にとって不便さを前向きに捉えようという考え方を持っておられる方も多いということがわかりました。ですから、単に都市化・工業化していくのではなくて、四国という場所を活かした将来の住む場として考えていければいいなあと思って議論してきたわけです。

本日は外部の講師を初めて呼びましたわけですが、我々の意見をもう一回、この場で議論できればいいなと思っている次第です。そのようなことで、本日はよろしくお願ひします。

②西村幸夫 東京大学教授・先端科学技術 研究センター所長 講演

<演題>

◆都市の読み解き方から考えるまちづくり◆ ～四国の県庁所在地を四都物語として、その面白さに迫る～

初めまして、西村です。よろしくお願いいたします。昨年度まで副学長をやっていました。研究センターの所長になると副学長は自動的に降りなくてはいけないということですが、実は副学長の仕事はしているのです。キャンパスの全体を見るということで、北海道から奄美大島までを見るというものすごい仕事をやらされております。



私は、元々は都市計画が専門で、建物群計画なども関係していますが、いろんなまちを見てその個性を活かして計画を作るというこ

とをやってきました。今、先端研というところにおいて、産総研とつながりは深いのですが、私自身はどちらかというと国交省や文化庁や文科省の方との付き合いが多い状況です。

今日は、お配りした資料があって、一つは松山のことについて書いているものです（「書齋の窓」掲載文：松山一山を囲む環状都市）。いろんなまちに行くのでそのまちの面白さですとか、なんでこのようになっているのかといった疑問点がどのまちに行っても湧いてくるんですね。それを解いていこうとすると、いろんなことがパズルみたいですごく面白い。プランナーの感覚でみたらどうかということを書いています。都市を経済で見たり統計データで見たり、様々な手法で見るということもあるでしょうが、歩いてみてなんでこんな構造になっているのか、歴史の中でどういう意味でこんなふうになっているのかというのを見ています。

今日は四国の4つの県庁所在地を比べてみようと思います。四国の人を前にしてやるのはかなり度胸がいるのですが、間違っていれば後で指摘してください。見ていただきたいのは都市を都市プランナーが見たらこんなふうに見えるということですね。

ということで、今日の題は「都市の読み解き方から考えるまちづくり」ということです。県庁所在地を四都物語としてその面白さに迫ってみようと思うわけですが、非常に共通したところと全然違うところがあるところが面白いですね。

いずれも城下町ですが、ほぼ同じ1600年頃の世の中が平和になった時期にできています。同じ城下町でも戦国時代から出来ている、例えば、岐阜とか鹿児島などありますが、そういうところはもっと歴史が複雑になるので、読み解きが非常に難しいのですが、四国は後



期の城下町ということで計画が非常にクリアで分かりやすい。そういう意味では共通しており比べやすいですね。そして中心市街地という視点で区切ると四国のまちはほかのまちに比べて回遊性に富んで非常に元気がある。それは一つの共通した特色ですね。

ところが、まちの構造を見るとかなり違っている。そういうところを読み解きながら見ていくとまちの面白さにつながるの、そういう意味ではここで検討されている「住みたいまちに生きる」ということとつながるのではと思っています。

.....
<松山>

まず、松山です。これは40年くらい前の松山ですが、外から来ると非常に不思議なところがいくつかあります。

一つはL字型の「銀天街」と「大街道」という商店街。このL字型の商店街が賑わっているところは日本にほとんどないですね。アーケード街はほとんどが一直線です。面としてなっているところは岐阜の柳ヶ瀬などですが、元々は「柳ヶ瀬本通り」一本だったんですね。ですから一本であることが多いんですが、松山はL字型。なんでそもそもL字型をしているのか。そこに住んでいる方は珍しくも何も感じてらっしゃらないと思いますが。

もう一つは「JR松山駅」から東に真っ直ぐに歩いてくると「伊予鉄」の線路がある。これも不思議ですね。もう少し外れを通れば

いいのと思ってしまいますね。

さらにもう一つ不思議なことはこの通りをまっすぐ行くと「お堀」に突き当たります。そこには橋があるわけではない。こういうまちの作り方は非常に珍しいですね。普通は道が交差するように作るんです。この点は、私はまだ解けていないので、今日ご存じの方がおられたら教えて欲しいと思っていますところです。

この図（資料1）は私が作成したのですが、ループ状のところに、この駅前通りがぶつかるような形で構造が出来上がっていると非常に珍しいわけです。遡っていくと、一つはすぐ分かります。JRができる前の明

治44年の地図をみると、ここに「松山市駅」がありますが、私鉄の競争が非常に激しかったところで、こちら側に「道後温泉」がありますが、「道後温泉」といかにつながり、路面電車の競合も激しかったのです。都市間の私鉄競合と都市内、路面電車の競合もすごく激しくてネットワークができたわけです。「伊予鉄」の線路は明らかに旧市街地の外縁を通っているんです。まちの真ん中を通ってはいないんですね。そしてその後都市が広がったのでJR松山駅がここにできたんですね。当時とすれば非常に当たり前のことだったんです。

もう一つはこの路面電車で「大街道」から「道後温泉」まで行くわけですが、「大街道」で乗り降りしたということがあって、ここと

（資料1）



松山の都市模式図

「大街道」をつなぐところが非常ににぎやかになったわけです。しかし、なぜL字型でないといけなかったのか。

それでもっと遡るとこうなっています。松山は城山があり4方向に都市が出来上がっているんです。こういう山があれば片方に都市ができることが普通ですが、松山は四方にできており、なかなか少ないですね。松山は他の都市と違ってあまり水があるというわけではなく、「お堀」もここだけにしかない。普通はこういうところ（お城の西側）が行政の中心になるのですが、残念なことに軍が置かれていましたので、行政施設は作れなかったんです。ですから県庁等の行政施設をどこに建てるかと言うときに選んだのが山（お城）の南側です。そして日当たりもいいし水も得やすいということで官庁街も住宅もできてきた。

そしてもう一つ不思議なのが「お堀」をすごく大事にしていること。戦後の計画においてお堀をいかに良くみせるかというところかなり力を入れたんだらうと思います。そしてずっと遡っていくと、こちら（南東方向）に新しくまちができていくわけですが、このまちがない時代まで遡ると、ここらあたりにお寺があったりして、ちょうど都市のエッジなんですね。そしてこのところが「銀天街」なり「大街道」なりになっているんです。都市のエッジに商業が移ってきて非常に盛んになって、また、路面電車の始発駅にもなるとにぎやかになったということでL字型の商店街になった。ということは、L字型は都市の輪郭線なんですね。都市の構造にL字型の商店街が非常にうまく表れている。戦災復興で区画整理をするのですが、ほとんどこのパターンはいじっていないんです。非常にうまくいったところだと思います。

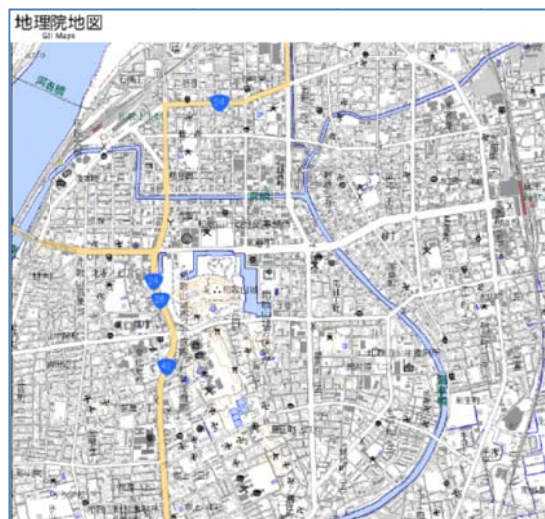
通りで一番大きい（長い）のはこの「平和通」ですね。そしてここ（お城周り）に道を

通して全部名前を付けているんですが、「東堀端通」、「南堀端通」、「西堀端通」と。つまり、堀端をいかにうまく見せるかということで都市を演出しているんだと思います。そしてここが「花園通」ですが、ここ（お堀）で突き当たります。こんなところはないですよ。この道は戦後にできて一番広い道なんですが、側道を持っている。側道をもっている道は松山ではここしかない。四国の中でも非常に珍しい。ここは戦後一番に作った目抜き通りですが、ここを何とか魅力的にして、「お堀端」から「銀天街」、「大街道」、そして「お城通」と回っていくようにすると面白いと思います。明らかに中心街として形成されているわけですから。ここ（南堀端通り）は初期のデザインを踏襲して新たに作り替えられています。道幅も少し広がっていますが、見るとものすごく力が入っていることが分かります。

ですから、お堀のそばを歩ける道にして、そこを正面にするということを本当に明確なプラン、構想にしているというのがこの場所の特徴ですね。こういうふうに環状の道路があって、環状の道路に突き当たる都市システムは江戸くらいしかない。

松山と似ている都市構造を持っているのは和歌山（資料2）です。

（資料2）



「和歌山市駅」があって、JRと南海電鉄の「和歌山駅」があって、似ていますよね。そしてお城の周りを、既成市街地が取り囲んでいる。しかし、和歌山の道路はどうなっているかという、駅前から来る道に十字に交わっており、「お堀」にぶつかるのではなく「お堀」のそばを通っていますね。「お堀」を回る環状道路が出来ていますが、「お堀」にぶち当たるようにはなっていないので、和歌山と松

山はまちのスタイルは全然違ったものになっているんです。なんで松山がそうなったのか。

いろいろなまちが十文字でできているパターンが多いですよ。例えば、大阪はJR大阪駅と御堂筋の関係、博多もそうですね。佐賀は典型的ですね。大分もそう。ですからほとんどの町がそうなのですが松山は違う。こういうところにすごく面白さを感じるんです。

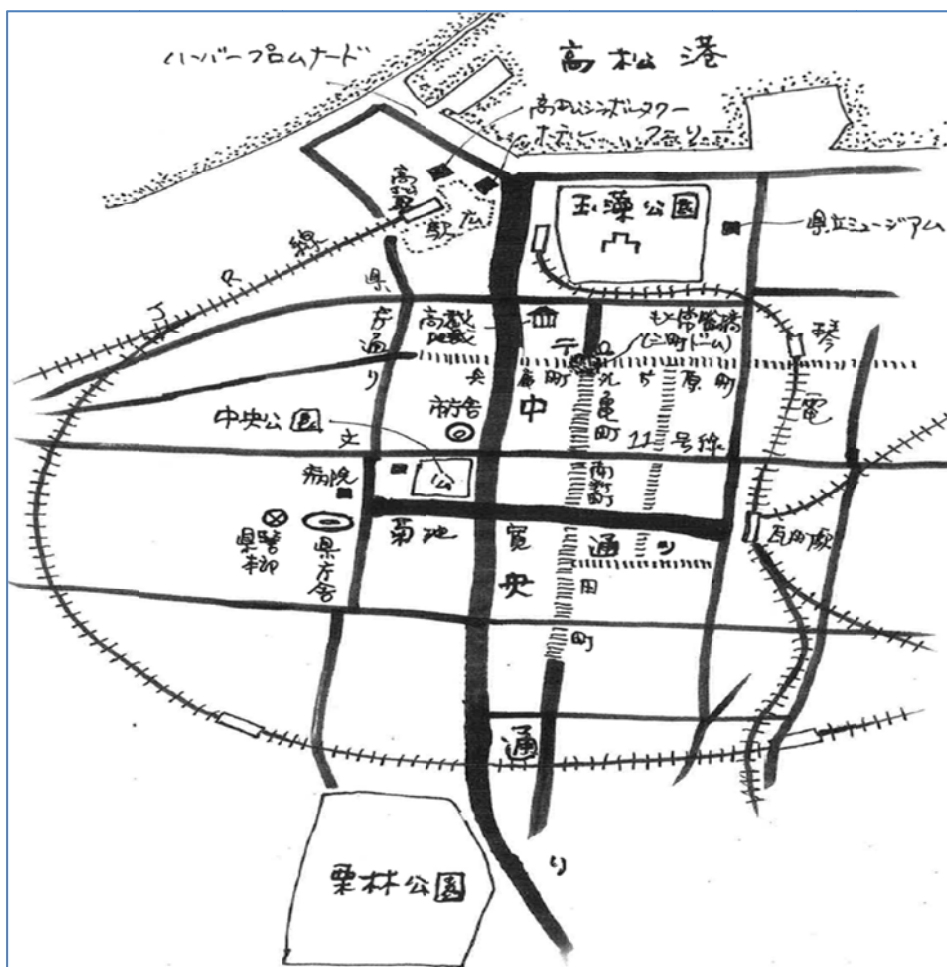
<高松>

次の高松（資料3）ですが、海に開かれていますね。

「お堀」が三重になっていますが、全部海水がきています。こういうところはほかにはないですね。ある意味、港を兼ねた「お堀」だと言えます。そういう発想そのものが普通の（資料3）

お堀にない。非常に開明的で、防御のことを考えないでいい時代が来ると考えたのでしょうか。来年の大河ドラマの主人公になっている黒田官兵衛が作ったという、そういう時代の都市のイメージなんだろうと思います。

もう一つ面白いのは、中心軸は「丸亀町通



り」ですが、普通どのまちにも街道が通っており、その街道筋が一番の中心になるというのが一般的です。しかし、このまちの場合は街道が通過するという感じではないんですね。港が四国の窓口としての出発地に当時からなっていて、こういう構造ができあがっているんです。そして「兵庫町」と「丸亀町」の突き当たる交差点が一番の中心になっている。そこが昔からの「札の辻」ですが、昔からの「札の辻」のにぎわいがそのまま今も続いているまちは非常に珍しく、県庁所在地ではこの高松と静岡しかないんです。

もう一つすごく面白いのは、「札の辻」の上の方は武家地で、南の方は町民地なんです。ここの裏側に「お堀」があったわけです。そこは今でも歩くと分かるんですが、雰囲気ガラッと変わるんです。北側のデパート（三越高松店）があるところです。武家地を市街化したときに広い敷地があったので公共施設がドンと建てられたんですね。ですから、ここ（三越北側）の雰囲気とこっち（三越南側）の雰囲気はほとんど同じ「札の辻」なんです。違いが感じられるんですね。そして「丸亀町」は非常に面白い縦型のまちになっている。こういう縦型で都心に向かって真っすぐ道があって、そこが都市の中心的な軸になるのは初期の城下町、つまり戦国時代の時代の造り方なんです。戦国時代でないのにこのように造ったというのは、おそらくここに人が集まって、ここから街道が始まるという交通ネットワークの結節点だったからです。後期の普通の城下町の造り方とはかなり違うんです。

その後市街化が進むわけですが、もう一つ面白いのは、こちら側に新しい道「中央通り」を造るんですが、「中央通り」は裏側を道路の表にしているんです。こうして都市の構造が出来上がっているんですが、近代は路面電車

が通ったり車が通ったりするので、これだけではもたないんですね。ですから「中央通り」に対してどういう形で新しい構造を創造していくかというのが課題になるのですが、駅前から電車が通っていた「県庁通り」とここ（商店街の通り）の間に都市計画道路として抜いて、戦災復興時に広げて今の「中央通り」を作り上げている。昭和天皇のご成婚の記念道路と言う名前がついていますが、この商業の歩行者の軸に対して裏側に自動車の道を造って、こちら側の「県庁通り」に鉄道の道を造った。両側からうまく真ん中の道を挟み込むように都市を造っていったんですね。

もう一つは、港がベースになるわけですが、当時との関係をうまく保っているところは非常に少ないんです。例えば、青森や函館や下関ですが、すぐ前に船が着くようにはなっていません。高松は駅の位置が何度も動きましたが、駅と港の近さが保たれているのは日本の都市のなかでは非常に特異な存在です。

もう一つ、「兵庫町」の裏ですが、水路の端の雰囲気をとどめています。これからこっち（三越近辺）を「内町」と呼んでいます。

もう一つは「中央公園」。これも4つの都市で見るとかなりスタンスが違って、お城こそ公園だと考えるまちが多いのですが、高松は新たに公園を造った。新たに公園を造ったのは高知と高松ですが、近代的な公園を緑のネットワークの軸に据えるかそうじゃないかは非常に大きな差です。

ここは戦前の都市計画道路が戦後も引き継がれ軸が生きている。それに対して「瓦町」からの横の軸、「菊池寛通り」と十字を作っている。そして十字を作った先が県庁なのですが、駅と県庁で十字のエンドを作って、それをつなぐ導線の交差点のところに「中央公園」を造っている。非常に近代公園の発想で造られている。ですから同じ公園でも都市によっ

てスタンスが全然違うということが分かります。道としては「観光通り」の方が広いですが、都市構造的にみるとこれが中心なんですね。それは戦災復興の都市計画道路を見ればそういう位置づけになっているのが分かります。その意味で、中心軸をうまくサポートするそれぞれの道を造っていったので、今でも元気な歩行者の道（商店街）として生きているのだと思います。

似ているのは静岡と申しましたが、静岡もお城に向かって真っ直ぐ行くところが一番にぎやかです（資料4）。ちょうど「兵庫町」と「丸亀町」のように似ているんです。ただここはアーケードはありませんが。この二つのまちは、一番お城に近いところがまちの臍として道路元標が置かれ、いまだににぎわいの中心であるという点や回遊性が高いところが非常に似ています。

（資料4）



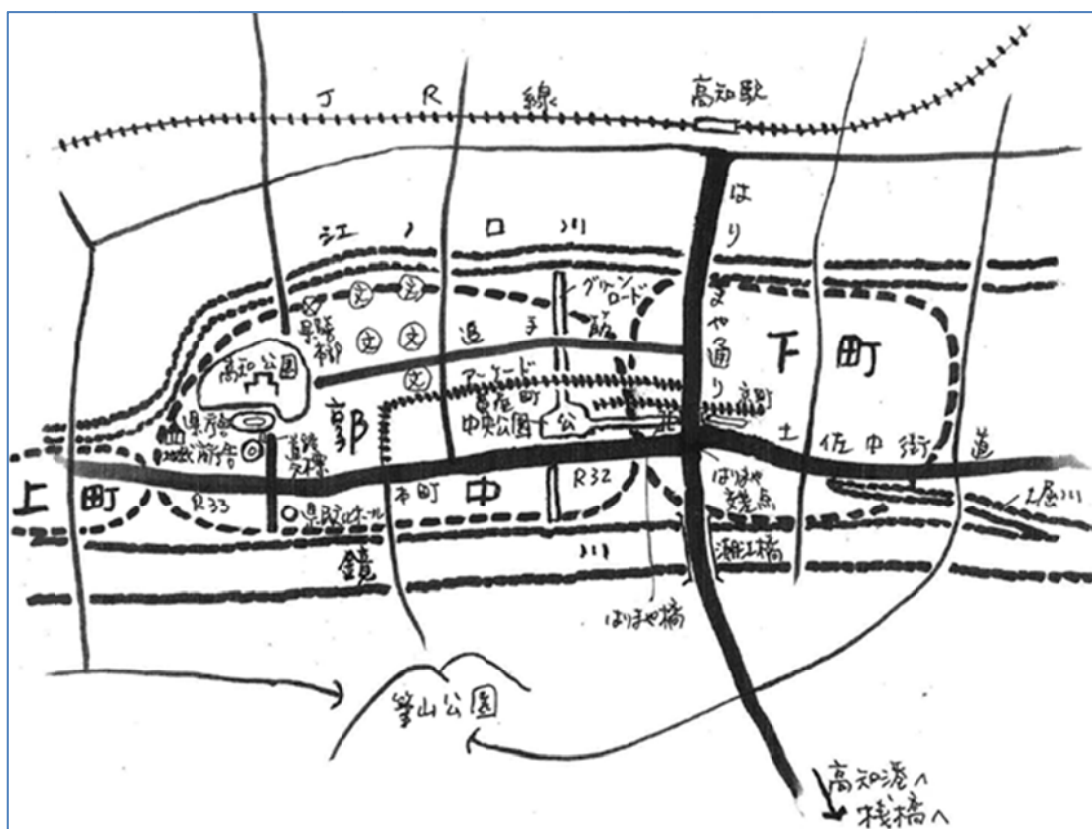
後で申し上げますが、静岡は高知にも似ているところがあります。高知の中央公園とそこに向かう緑道が結構似た形をしているんです。静岡は「常盤公園」というのがあって、これは防火路線帯なんですね。静岡大火というのがありましたので、その後にできました。これがある意味緑の軸になっていて、それがちょうど「東海道」と並行してあります。駿府のお城は家康が一番晩年に造ったお城であり、城下町としてグリッドパターンの完成形をしています。攻めるとか守るとか関係ないので、商業を如何に効率よくするかが考えられている。そういうことから見ると、そこにもう近代の軸を入れて、なおかつ広い道はその中に通さないで周りに大きな道を通してある。だから非常に回遊性に富んだ魅力的なまちになっている。静岡は観光地でないので、そういう目で見ると人は少ないのですが。緑地帯の突き当たり（お城の南）に県庁や市役所があって、非常にコンパクトシティでもあるんです。

.....
<高知>

次は高知（資料5）です。

「江ノ口川」と「鏡川」の間にあり、ここが中心ですね。そしてもう一つの中心が港だったわけですね。港に如何につながかが重要だったんです。そして徐々に「下町」とか「上町」とかが出来上がってきた。ここに「お堀」があったのですが、今はなくなっています。ここに「中央公園」ができて、ここが有名な「はりまや橋」で、緑道が「中央公園」から東と北に延びていますが、近代の公園ネットワークをうまく活かしている。川から反対側には市街地は基本的にはできなくて、元々はこの中に町人がいたのですが、外に出て行っています。ですから軸が少しずれているんです。これは明らかに時代が違うことを表し

(資料5)



ている。最初はこういうまちだったのです。「高知駅」は1930年代に県庁所在地では最後にできたのですが、それまでは明らかに港に向いていたわけです。ここに「土佐中街道」がありますが、その後の軸になるわけです。ですからこの横軸は昔から変わらないのである。これに対して港に行く路線を造ったわけですね。

面白いのは、「お城」から「追手筋」がこちらへ伸びていますが、この辺が今も教育と商業の中心になっています。当時、山内容堂が造ったのがここですね。このところにある意味行政の軸みたいなものが明治以前からあって、今でも県庁、市役所、公会堂があるところですが、どちらもお城を狙って出来上がっている。

ですから2つの軸があってこのまちの場合にはここに道路元標があるんですね。そして戦災にあって戦後に拡幅をしてこの十字を強

化するんです。戦災復興でできてきた道もこういうふうに緑の軸を通すような形で非常に意図的に計画しているんです。

高知がすごく面白いと思うのは、城下町としてのお城を中心とする「追手筋」とこちら側の筋が非常に明快になっており、そして街道のところ、家中、武士の住まいのところとその上と下の構造が非常に明確に出来上がっていて、それが川の間にあるわけです。城下町を近代化するときはその構造を壊さずに新しい緑のネットワークなどを入れて行ってうまく重ねているんですね。

少し分かりにくいのですが、特に面白いのがこの「中央公園」とそれをめぐる緑のネットワークです。「お堀」を埋めたところが緑道になって北の方にもグリーンロードがあって、このちょうど間のところに「帯屋町」ですがアーケードになっている。ですからメインの大きい道路の間に緑道やアーケード街があっ

て、戦後うまく造りあげたんですね。江戸時代のネットワークに重なるようにアーケードや緑のネットワークを造って、こちらに十字の道を造って、家中を壊さないようにしているんです。ですから都市としての雰囲気は道路構造としては結構分かります。もちろん戦時に焼けていますから歴史的な建造物は少ないのですが、このように見るとその特色が非常に見えてくるんです。戦災復興時の設計図を見るとよくわかりますね。中央公園は小さいですが歩いているとうまいぐあいにたどり着けるような非常にうまく設置されている良い公園です。

高知は構造的に言うと水戸と似ているんですね（資料6）。「那珂川」があって「千波公園」があってその両側にまたがっている。ただここは少し高い尾根になっており構造は少し違いますが、でもお城があってこの辺とこの辺の両側に商業地があって、こちらは空堀ですが、構造的には似ているんです。

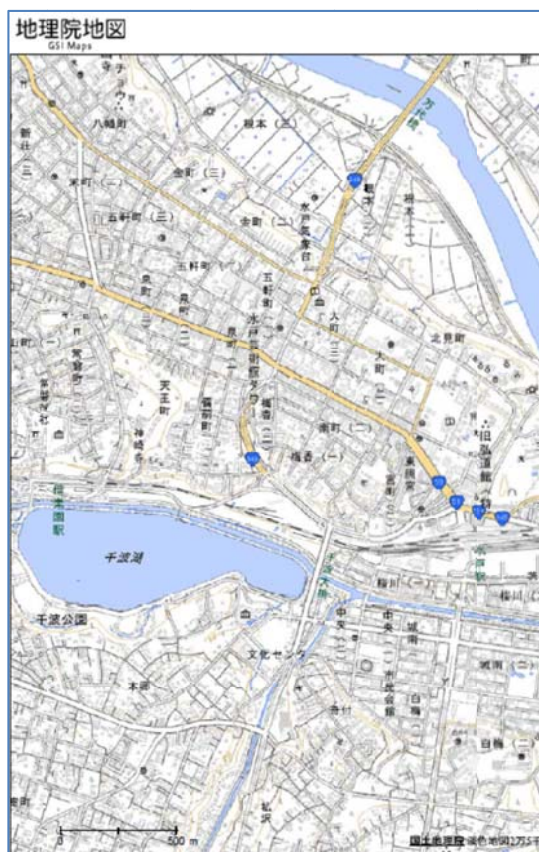
.....

<徳島>

最後は徳島（資料7）ですが、徳島は河口のデルタ地帯にあってそれぞれが島と呼ばれており、その島全体を一つの城下町として計画しています。その時の考え方が、広島に似ているのですが、都市の造り方は全く違ってあるんですね。どう違うか、徳島の場合はそれぞれの中州、島がある種自立しているんです。そして島と島を結ぶ橋が制限されていて、それがお城へ向かうアクセスを制限するようになっている。“ビーズ都市”、ビーズみたいな穴が開いていて、いくつかのビーズがつながっているような感じですから、そう呼んでいるんですが。そしてそれぞれのところに商人地を持っているんですね。

ご承知のとおり、「ひょうたん島」と呼ばれ

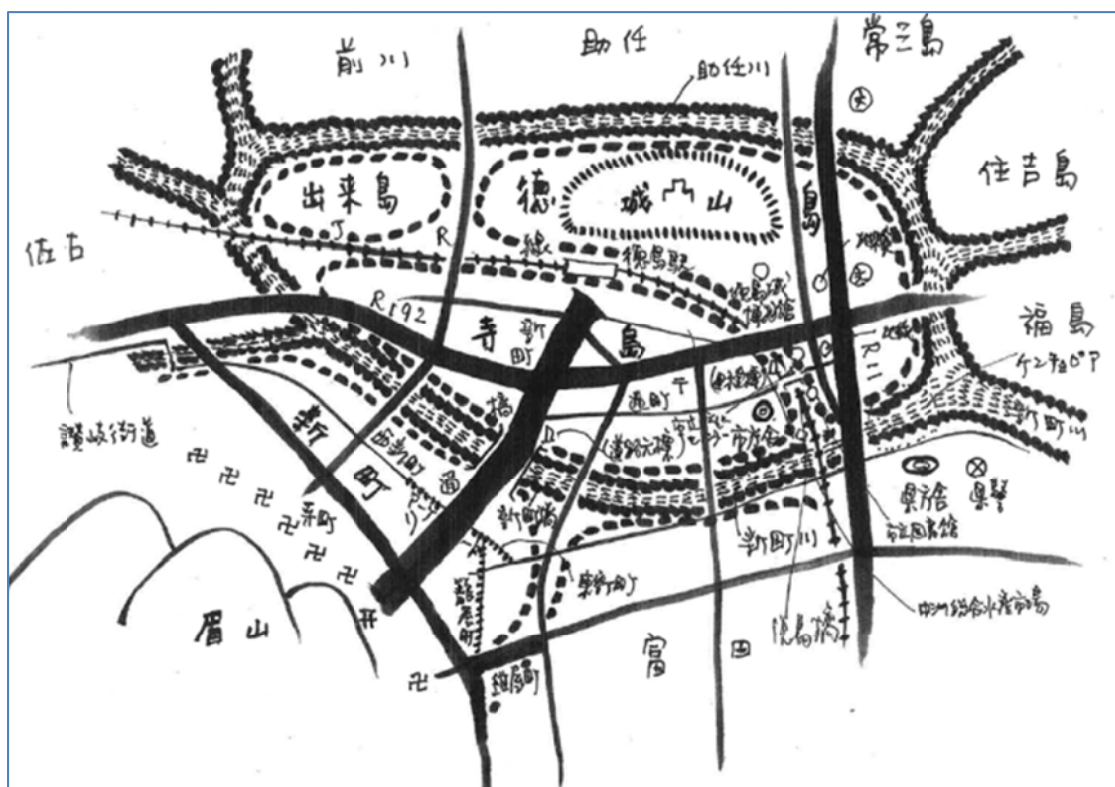
（資料6）



ており、「徳島」と「出来島」と「寺島」の3つの島があるんですが、元々はお城に行くには基本的に「徳島橋」を渡って行きました。そして、この「徳島橋」とここ（「新町橋」）しか橋を造らせなかったのが、非常に中州が方向性を持っているんです。ですから「徳島橋」周辺が中心地になり非常に重要性を持っているので県庁ができ市役所ができたのです。今は、県庁は動いていますが。だから当時は非常に重要だったのですが、今は、ここに線路が通って、なおかつ「お城」が背中側なので、「徳島駅」で降りても「お城」がイメージできないですね。

なぜそんなことになったのか。今は「徳島駅」を降りると目の前に「新町通り」があつ

(資料7)



て突き当たったところはロープウェイがあるがそれ以外は何もない。広い道はあるが何でそんな道をつけたのか。なかなかピンとこないのですが、元々、「徳島駅」は終着点だったので、高松みたいに「お城」の南を開いたので、ですから「お城」を大事にした構造ではあったのです。ところが小松島が港として元気が出てきて、そこまで鉄道を延伸するという事になって、そこを埋めて、なおかつ線路を通しましたので全く分断されてしまうんです。ですから、「徳島駅」で止まっていると非常にうまくいっていたものが変わってしまったということですね。

もう一つ、なぜこの道が広くて突き当たりにも何もないのか。もともとは建物疎開のあったところなんですね。それが戦後の戦災復興の都市計画の観点になったんです。それは全く広島と同じです。広島の「大通り」は建物疎開の跡であり、だから単純に東西に広い道が通っている。ですから建物疎開でこの道が

できたことを思うと、結構分かってくるんですね。長崎も目の前に大きな道がありますが、行った先は川に突き当たって何もない。建物疎開の歴史は明確に描いたものがないのですね。負の歴史と思っているのか明確にされていませんね。分かればなるほどと思うんですが。

それから面白いのは、徳島はこちら側（南側）に徐々にまちができていますが、一つ一つの島がそれぞれ論理を持っていて少しずつ広がっており、方法もバラバラなんです。ここに二股のアーケード（「東新町2丁目商店街」と「籠屋町商店街」）がありますが、最初からそんなことは考えないですよ。そこは街道筋なのですがそれがアーケードになっている。だんだん都市がそっちに広がっています。「新町」ということですから。こっちは御用商人ばかりだったので、武士がいなくなって全く違った形になったんですね。本当に少しずつビーズの玉が増えていくみたいに都市が広

がってきて、このように大きくまちが変わるんです。

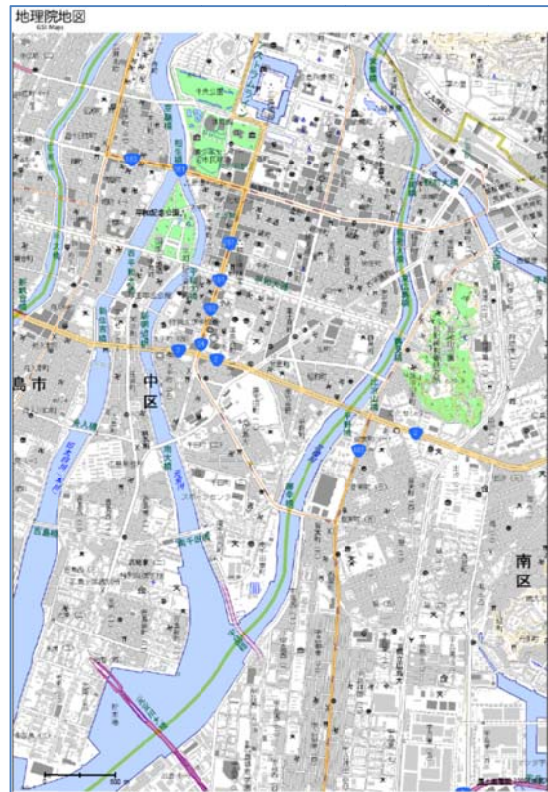
そして、現代になると東の方に大きな道路が通りますが、道路の通り方はこのビーズの増え方と全然違う論理で通されるので、そこを歩いていてもまちがどういう構造で成り立っているか非常に分かりにくくなっている。それはおそらく川の側からもう一回見直すと再生できるのではないかと思います。

元々、ここに道路元標があって、その後、「新町橋」のたもとに移されたんですね。新しい道路はそれとあまり関係なく通っているので、道路を通ってもなかなか構造が分からないんです。だから、川沿いを歩くとまだイメージが残っていますので、逆に川沿いからもう一回このビーズみたいなのを大事にすることを考えていくと都市の構造が見えてくる。なお、県庁は移りましたが、県庁からポートやヨットが見えるのはここだけです。

これを広島（資料8）と比べてみると、非常に明確です。

広島はこれだけ島があるのですが非常に明確な構造をもっている。「西国街道」と南北の軸がはっきりしてますよね。このように新しく都市を造ったわけです。これも同じくらいの17世紀初めに出来上がって、元々はもっと山の中にあっただのですが、川の麓まで毛利が下りてくるわけです。何故かと言うと港として瀬戸内海に開かれるわけですから交易を基本としたまちになるんです。ただ、昔からこの中州にはまちがあったみたいで、だからここだけ構造が少し違うんですが、広島は全体が一つで川がそれを切るものとして存在しますが、徳島の場合は島一つ一つになっている。「元康橋」というところがこの「西国街道」の一番賑やかなところで、道路元標もここにある。広島はここら辺に建物疎開のために平

（資料8）



和大通りという100m道路を造って大きく変えたのですが、アーケード街は今でもこの場所にあります。そして一番大きな「相生通り」の北側に県庁や公共施設があるんですね、「お城」の関係で。これは「お堀」の線なんですね。そういう目で見るとやはりでっかいデパートなども全部ここにある。だから大きくまちは変わったんですが、こいうふうに出来上がったときの構造はある意味続いているわけです。

「原爆ドーム」周辺は、この斜めの道だけは残しているんです。ほかは幾何学的なんです、この道だけは歴史を踏襲しているんですね。

ただ、「広島駅」は変なところにありますね。普通だとこの変にありそうなんです。何故かと言うとはっきりしている。「広島駅」と「宇品」を結んで、軍事路線としたんです。そして「宇品」の軍港からいろんな物資を出したわけです。元々ここまでしかなく山陽本線の

終点だったんです。でも今から見ると非常に端っこにあるように見えるわけです。

もう一つ広島が頑張ったのは川沿いを緑で埋めたことです。「平和大通り」もそうです。「元吉橋」のところに道路元標がありますが、「相生通り」なども大きく拡張しました。もう一つ面白いのが、「平和記念公園」のあるこの道の先に広島市はごみ処理場を造るんですが、デザインがゲートのようになってますね。アートみたいな形をしており、建築家もよく見学にきます。「原爆ドーム」の周辺も緑を多く配置していますが、昭和30年代に整備しました。この結果川沿いが非常に魅力的になっている。再生のシンボルとしての緑を大事にしています。

.....

<まとめ>

それで、まとめですが、四国の4つの都市について類似の他地域の都市とも比較しながら紹介しましたが、それぞれすごく個性があってそれぞれのまちは元々似たような時期に似たように生まれて近代化も似たように行っている。戦災も松山以外は同じ日の1945年7月4日に遭って戦後復興が始まったのですがコンセプトは非常に違って非常に面白いなと思います。少し長くなりましたがこの辺で終わります。

③質疑応答・意見交換

(松木)

西村先生ありがとうございました。我々がやっている議論と全然違う話でもあったのですが、非常に楽しく聞きました。それで、歴史的に都市を振り返っていただいて、改めていろんなことに気付いたわけですが、政治的にいろいろある中で都市が生まれてきて、その時のファクターとして交通手段とか情報のやりとりとか経済的なものとかがあってまち

が出来上がってきて、それが日本の場合には特に戦災ということがあって変わってきた。そういういろいろなファクターを受けながら変遷してきたということが感じられました。

それぞれの都市ごとの生い立ちがどう活かされているかお話を伺え、大変面白くお聞きしました。それで、質問ですが、将来にいくときに今申し上げた政治とか交通とか情報とか経済とかいろんなファクターがあると思います。我々が議論してきたのは、住民がこういうところに住みたいという意図は昔はそんなに多くなかったかもしれないと思いますが、将来、都市が変わっていくときのキーファクターは何をドライブフォースとして変わっていくのだろうか。今見ると交通的な手段が一番変化が大きいので、例えば、主役は昔は馬から船になって、鉄道になり、今は道路のようになっているし飛行機も出てきている。そういう交通的なファクターが都市を変えていくのか、それとも、何か別な形で、特に四国みたいな地方都市が今後変わっていくときに、どういうものが主たるキーファクターとなっていくのかなと思ったんですが、それについて何かお考えなりお感じになることがあったらお願いします。

(西村教授)

一つは、どの都市もある意味条件が似てくるわけですね。つまり、ITの世界の中で情報を取ろうとすればどこにいても取れる。また、情報を発信するにしても誰でも発信できるし、コミュニケーションもしやすくなる。その時に都市を差別化するもので何があるか。一つは生活のしやすさとか文化的なものとか、そこに生活する意味みたいな、子育てがしやすかったりとか、お年寄りには病院通いのサポートがあるとか、ある種生活の総合的な安全保障みたいなものが満たされるのがすごく

大きいのかなと思います。ある程度の都市の規模の場合はベーシックなサービスの質はそれほど変わらないのではないかと考えています。そうするとそれにプラスアルファして、そのまちに住んで非常に魅力的だと思えるようなもの、そのまちとして自慢できるものがあれば、非常に知的な人達や産業を引き付けられるのかなと感じますね。文化的な発信力とか、それは非常に魅力的なスポットがあるということかもしれないし、ある通りが非常に面白いとか、他地域にはない祭りといった文化的なイベントがあるとかいうことかもしれないしいろいろだと思いますが、何かある種そういう総合的な都市の魅力みたいなものが非常に吸引力になる。

これからは都市が物理的に変わっていくというよりは、いかに優秀な産業や産業を支える労働力を引き付けることができるかということではないかと思っています。アメリカだとシリコンバレーみたいなところにみんな行きたがる。その情報的な環境だとか生活の環境、質みたいなものが高いと。だからそういうものの価値をどれだけ生み出せるかということになってくるのかなと感じていますね。ひょっとしたら美味しい食べ物があるとかいうこともあるかもしれない。その一つとして、今日、私が喋ったような話も、まちが実は非常に魅力があるとか、このまちにはいろんな云われがあって当たり前に見えるけど奥が深いだとかいうようなことは、そのうちの一部分を成しているのではないかと思うんですね。



(松木)

さきほどの広島の場合も、川沿いを魅力的にすることによって、新しい広島の魅力を作ろうと考えられていると感じました。

(西村教授)

そうですね。広島の場合、川沿いの緑の場合は、ものが全部なくなった時に川沿いというのが一つの手掛かりになったこと、もう一つは原爆が落とされて20~30年は草木も生えないのではと言われましたが、その次の年に新芽が吹いたんです。ということは緑がものすごく希望の象徴に思えたんですね。だからそういうものを大事にしていくということをまちづくりの中でうまく旗として立てたら、みなさんが納得してくれたということがあったんだと思います。

(松木)

都市計画について、戦後の復興計画を立て実際にまちづくりを行っていくに当たり、それを決定していく人達のはあまり考えたことがなかったのですが、役人が決めたのかなあという程度にしか思っていませんでしたが、具体的に将来を構想してプランを決定するポイントはどこら辺にあったのでしょうか。

(西村教授)

どういう人かというのと、地方で人がいなくなったので、内務省の官僚、中央の官僚が各地に行って計画を作ったんです。東北の震災復興みたいに中央からいろんな人が来て作った。道路に関しては標準があるので、それを当て嵌めていくのですが、それぞれのまちの特質を反映させる計画を立てたんです。ただ、非常に短時間に集中してやる必要があったので、今から考えるといくつかミスもあるのですが、それなりの工夫がなされている。

実は焼け跡になる前から絵を描いているんです。建物疎開をその人達は描いているので、戦後のことも考えていたんですね。戦争をやりながら戦後のことも考えていたテクノクラート達がいたということです。

もう一つ、どこもそうかもしれませんが、松山の計画は都市を壊さないで造っていて、すごくうまくやっていると思います。調べてみると県庁も市役所も無事だったのでいろんな作業をゼロからやらずに済んだ。他の地域は地図から作らないといけないとか測量から始めないといけないとかあったんですね。ですから松山はいろんな情報をベースに次のプランが作れたんじゃないかなと思います。

(松木)

日本の場合は、戦災で中核都市が焼け野原になったということで今のまちになったと考えていいですね。

(西村教授)

焼けていないところ、有名なところでは京都、奈良ですが、札幌、盛岡、山形、新潟、金沢、それに山陰地域ですか。太平洋から遠いところは残ってますね。

(松木)

今の都市を見られてうまくいっていないところでここはまずかったと思われるところがあれば。今現在の視点から見てということですが。

(西村教授)

例えば、徳島の場合、「お城」が全く背中になっていて、「徳島駅」を降りた時に逆方向になっていますね。だからあれは何とかしたいなと思いますね。「お城」側にも改札口を造るとかね。何かやりようがあると思いますが。

(松木)

先生の理想では、「お城」や県庁といった歴史的な建造物を活かしてまちづくりを行っているということでしょうか。

(西村教授)

元々のでき方を調べていくと地形を大事にしながらまちができていっているんですね。今の地図からだんだん遡っていくと、例えば明治時代ですとか、その都市の骨格というのが非常に良く見えてくるんです。本来なら建てるべきでないような洪水が来たら浸水するようなどころまでまちができてきてしまって、何か技術で持たせているようなところがありますね。その意味では、どこが大事かということ、今の地図で見て行政はそれをなかなか言えない。将来、空き家ができてきて都市も縮小しないといけないとなったら、どの辺から縮小させるかの選択に迫られるかもしれませんが、今、ここはダメというようなことは言えないので、そういう戦略を立てることに戻込みしてしまいますね。でも、少なくとも歴史を遡っていくと、骨格のまちが見えてきて、そこは今でも骨格を形成しているんです。ですからここが大事でここに資本を投下して、ここだけは何とかしないといけないという論理は議会なども納得しやすいのではと思います。ある意味、我々がやっているのはそういう都市の戦略を立てる時に、理屈は良くできていても市民がノーと言えなかなかに認められない社会になってきているので、合意が形成できるような論理を創っていくことが必要で、そのために今やっているようなことが参考になると思います。

(松木)

明治あたりの地図をちゃんと見て、その意図を汲み取りながら将来の絵を考えるのがいい

いだろうということですね。

(西村教授)

そうですね。もう一つは、城下町の場合ですと、1600 年前後の 50 年間くらいでほぼすべての構造が出来上がっているんです。また、宿場町もそうですね。こういうのは世界の中では非常に稀です。欧米だとコアがあってそこから徐々に広がって行ってます。バームクーヘンみたいに。アジアの都市でも、基本的にある時に城壁ができて、またある時にまた城壁ができてと、一瞬にできあがった都市はないのですね。その点日本の都市は特殊で 17 世紀の頭にほぼ全ての大都市が揃うんです。50 年くらいの中に出来上がっているの、どうやって造ったかとか何故そこに造ったかとかどういう意図でまちを構成したかというようなことが非常に明確に分かります。つまり全てのまちがある時期の計画都市なんです。他の国の人に言わせると、日本は都市にある種の原型があると。その原型から今の都市につながってきているので、どんなに変化したとはいえ、徳島は徳島、松山は松山としてつながってきているところがあるんですね。ですから何でもここにこんな道があるのかななどを考えると次の計画のヒントが生まれるような気がしています。

(松木)

東京近辺は境目なく広がっていますし、30~40 万人の地方都市とは随分性格が違うなど高松に来て思ったんですが、将来を考えた時に日本の都市としてどちらがいいのでしょうか。個人の考えにもよりますが、私は高松や徳島などの小さい都市が住みやすいし、安全なども考えた時にいいサイズではないのかなと思っているのですが。都市のサイズ感というものがあるのでしょうか。

(西村教授)

巨大な都市はどこか壊れると修復するのが大変です。ですから巨大なものは脆いと思うんです。東京で何か起こって交通が遮断するとほとんど動かなくなる。その意味では、私もある種自立した都市、自立圏というのがあって、その自立した都市とその周辺で食料も確保できるような自立分散型の都市、ヨーロッパではそうなっていますが、それが一つのあるべき姿だろうと思っています。

世界と競争できる巨大な都市はあってもいいですが、そこだけが勝って他が寂れるという状況は拙いと思います。東京は上海、シンガポールなどと競争してもらっていいけど、一人の人間として生活のことを考えると、生活圏はその極一部ですので、その意味で、私は 40~50 万人くらいで圏域として 100 万人くらいが住みやすい生きやすいところではないかと思っています。

(近森)

面白い話をありがとうございました。私は、高知に生まれて 18 歳まで高知に居て、札幌に 1 年居て、その後ずーと徳島に居ますが、高知の方がまちとしてのボリューム感があるなと思っています。高知の方が構造的に納得がいく形になっている。もう一つは、徳島だけが市内電車が走っていない。そんなことが関係しているのかなとも思いました。

また、私は環境教育を担当して、個人的にも「吉野川河口」の観察会の世話人もやっていますので、大きな橋を架けまた高速道路も通るということで、私はもっぱら県庁への要望書を書く役目もやっておりますが、たまたま明治 29 年に陸軍陸地測量部が作った 5 万分の一測量地図が、「吉野川河口南岸」にある川内の土地改良区が作った報告書に載ってまして、そしてそれ以降の手に入る地図

を重ね合わせながら、徳島の河口の変遷を授業の準備もしつつ考えてきたり、自転車で近辺をぐるぐる回りながら、今の地図と前の地図を比べて見たりということをやっています。それで感じていることは、「吉野川」の北岸の川筋などは明治29年とほとんど変わっていないのですが、昭和の初めに大改修をやりまして真っ直ぐになるように本流を変えているんです。それで徳島の北の方は中州であって干潟のような状態のところを干拓工事しながら新田開発をやって、まちが川の流れに沿ってだんだん海の方へ発達してきている。そして1990年頃には工業団地も造るなどやっており、今でも徳島市の東の方は再開発が進んでいます。だから歴史的に徳島の場合は、川の流れに沿って海へ海へと土地が動いていっている中で、歴史の方向性があるのかなと感じてたんです。

ところが、四国はどこも同じだと思うのですが、そういった流れの中でまちが造られていく方向がいきなり大規模ショッピングモールができる、しかも「吉野川」の北側の田園地帯に忽然とできる。今は2つもできているんですが、そうすると中心部の都市機能がかなり低下してくる。例えば、徳島市内には映画館が1軒もありません。私は車の免許を持ってないので映画館に行こうとするとバスの時刻表を調べて行くのですが、今までの歴史の方向性みたいなものが、大きな商業施設ができるインパクトによって、元々都市の中心部にあったいろいろな機能が、公共交通網もそうですが、結局、私みたいな交通弱者は都市の中では自転車で移動できる範囲しか動けないし、ある意味魅力がないまちになってしまう。

都市づくりの理論として、17世紀の頭に作り上げられた都市の論理が他の論理に移りつつあるのではないかということを感じていま

す。先生はその辺のことをどうお考えになるのでしょうか。特に地方都市ではそういう状況が出ている。東京ではそういうデカイショッピングモールはないような気がします。

(西村教授)

まさにそういうものが中心市街地の衰退を招いていると思うのですが、恐らく、これからの流れというのは、ショッピングセンターは過剰な状況になってきているので、都心の交通弱者が自転車で行けるような範囲でサポートされるようなものが求められていると思うんですね。ショッピングセンターの潰しあみたいになって勝ち負けができていって、負けたところはもっと悲惨な状況になっていく。そうした中で都市はどうあるべきか、都市の中でしかできないような、住んでいる人がいるので、しかも高齢化が進んでいるので、そうした人達をサポートする店はなくならないですね。ある種のベーシックなサポートというのは必要だし、あり続けるとは思いますが、400年くらい都市が続いてきており、蓄積されたものを戦略的に売り出すようなものが重要だと思いますね。老舗の料亭や食べ物屋さん、お菓子屋さんとかそういうところがあると思います。

またもう一つお祭り等の文化的な営みはここが舞台なので、例えば「阿波踊り」の舞台になるような戦略をつくることは決してなくならないと思いますね。文化とかアートとか食とか、またお年寄りをサポートするとかは、元々都市の戦略としてこれからも残っていくのではないかと。そうするとショッピングセンターで買うものと都市生活であるようなものが両方両立するようバランスがとれるようにもっていかなくてはいけないし、そういう戦略について考えないといけないのかなと思います。昔のように全てのものが都市でそろ

という状況ではなくなってきました。周辺にも人が住んでいますし、わざわざティシュペーパーを都心まで買いにくるようなことはないので、一定程度のものは残るんですが、そこでは満足できないような都市の価値みたいなものがあれば残っていくでしょうね。

(近森)

逆に言うと、そういうものを創りだしていく努力が求められているということですね。

徳島市では今また箱モノを造るような議論がある一方、新町の商店街の人達はほかにやることがあるのではとか議論がいろいろあるようですが、やはり行政は箱モノに行く傾向が強いので、元々のまちの成り立ちとか郊外と都市のバランスの問題とか、そういう議論が必要なんだということに気付いたところです。

(西村教授)

「新町川プロムナード」とかいろいろやられていますよね。ああいうことはショッピングセンターでは作れませんから、川沿いをもう一回表側にするというようなところに可能性があると思います。

(三木)

まちの川の辺りを整備するのは良いと思いますが、それは外から来る人のためにやるのでしょうか、それとも中に住んでいる人を、そのまちを活性化するためにやるのでしょうか。さきほど言われましたが、「新町」周辺も過疎化と言えなくもないようですが、商業施設が消滅しかかっていて住むにも住めなくなってしまっているような商店街もあるように思います。そうなってくると周辺をきれいにしても住んでくれるんだらうかという心配がありますね。「阿波踊り」にしてもお客さんを

呼んでくることは簡単なのですが、住む人が少なくなれば都市自体が崩壊してしまうという危険性があると思うんです。だから、まちを維持するには住む人を増やしていかないと議論が必要だと思うんですね。

(西村教授)

さっき言いましたように、住んでいる人の日常サービスがサポートできるようなものが都心でもう一回できないか、例えばボードウォークでパラソルショップのような朝市みたいなことをやるとか、それは住んでいる人達のためですよ。それで高齢者が多ければ、もう少し違う形で、現代版御用聞きではないけど、もう少し近在の農産物がうまく朝市的なもので生まれ変わるようなこともできるのではないかと。それがああいう（川沿いの）風景が良いところでやられれば、おそらく地元の人に人気がある朝市というのは観光客も必ず来ると思うんです。だから戦略的にそういう舞台を活かすということではできないとは思いません。全然人がいないわけではないので、ベースとなる人口があるので、そうした人をちゃんとサポートするというようなことを考えていけばいい。また、今まで裏だったところを表にするなども。

非常に難しいのは、過去からある商店街は昔栄えたころの記憶があるので、高い値段でしか店舗を貸さないとちょっとの期間であれば貸さない方がマシとか、非常に誇りを持っているわけです。その人達が次の世代に代わる時期なので、更地にして駐車場にするよりは、駐車場と同じあるいは少し安いぐらいの家賃で貸してあげたら若い人達は結構戻ってくるのかなという気がしているんです。若い人はそういうお店でつながりを持ちたいんです。何かショップをやりたいかと思う若い人は増えているんです。お金を稼ぐという

より、変に事業者に使われるよりも自分が好きなことをやって、好きなものを売って、そこに来る人達とこじんまり仲良くやりたいという人が多いですね。

(三木)

そういうことを盛り上げようとする行政ではダメですね。成功例からみるとどういう刺激の仕方、モチベーションの高め方をすればいいのでしょうか。

(西村教授)

そうですね、空き地みたいなところを安くてもいいから貸してやるという人が10人に1人、20人に1人でも出てくれば動くんですね。そして一つ成功するとそれを見ている人がいるので続くんです。今までもそれなりに(成功例が)あるんです。それは中心商店街の裏通りなんですね。表通りの人はそんなに困っていないし、そこまで落ちぶれたくないと思っているので。裏通りや狭い道のところはそうも言っておれないので、安くても貸すとかありますね。そういうところが動くんですね。一番手っ取り早いのが食べ物屋さんです。流行るところが必ず出てきます。これが目抜き通りだと、火を使うと火事を出すから臭うから貸さないと聞きます。そのようにして裏通りから再生していく。そんなところが割と多いですね。

(大嶋)

今日のような話はこれまで一切聞いていないので非常に参考になりました。そこで質問ですが、都市の構造と県民性に法則性があるのかどうか。環境が人を作る、あるいは住めば都と言いますよね。ほかに気候とか関わってくると思いますが。法則性があれば、こういうふうにしていこうとするときに非常に

参考になると思うんです。

(西村教授)

ちょっと難しいなあ。一つは、気候は決定的に関係ありますね。寒いところ暖かいところでは全然違いますよね。まずは都市構造というより風土的なものがあると思いますね。もう一つは祭りなど見ていると、祭りが文化を規定していると思いますね。というのは日本の祭りは非常に不思議で、建物はそれほど多様性、つまり、木造、畳、柱、間取りなど、多様性は少ないですね。ところが祭りは、はだか祭りからものすごく古風な祭りまで、同じような都市でも全然違うことがあり得る。同じしきたりを続けることが大事で、例えば「京都祇園祭」などですね。私は福岡の出身ですが、福岡の「山笠」は毎年燃やしてしまうんですね。そして次の年はゼロから新しいものを作るんです。そういう祭りは結構あるんですね。そうすると祭りの構造は県民性に影響があると思うんですね。伝統を大事にする祭りのあり方と、祭りのエネルギー、新しいものを作ることを大事にする祭りのあり方で育った人では違うような気がしますね。

逆に祭りが都市の構造と影響し合っている可能性もありますね。というのは曳山を引く祭りではルートとかすれ違う場所とか回す場所とか、そこがクライマックスになるので、場所が決まっており舞台になるように仕組みられているんですね。ですからまちの形と祭りとはお互いに影響し合いながらできているのかなと思います。そうすると非常に間接的ではあるけれど何らかの関係がある。例えば、港町は開放的と言いますよね。農村では稲作地域とそうでないところは文化も違いますよね。水のネットワークの中で生きているので一人だけ別のことをやれないという封建的な文化と畑で生きているような文化。ですから

直接まちの形だけが影響を及ぼしているのではなくいろいろなことが影響し合っている気がします。

(石塚)

今高知に居ますが、高知は南海地震が控えています。南海地震が起きた後にどういう都市設計を行うかが重要で、そういう議論も大学として行わなければという議論もあるのですが、都市計画面で教育機能が戦後陸軍跡地などに建てられたものが多いようですが、すごくその辺りの歴史を知りたいと思いました。大学、高等教育機関が戦後そういうところに立地されたことによってどのような役割を担ってきたのか、また地域の地方都市の都市計画のあり方というのは学会でどんな議論がされているのでしょうか。

(西村教授)

後ろの質問である地域の都市計画のあり方ですが、今いくつかの流れ、研究の流行みたいなのがあって、東北の災害があったので事前復興と言っていますが、災害に強いまちをつくっていかないといけない。災害に強いまちというのは、恐らくはコミュニティがしっかりしていて、減災をどうするか、壊れた建物におばあちゃんが一人で住んでいると分かっていたら助けに行けるけど、誰が何処に居るか分からない状況では助けようもないですね。だからコミュニティがいかに支えあえるかということまで戻って計画を立てていく。その時に、例えば広場があって、発生した瓦礫をちゃんと収容できたり、一時的に暮らせたりするようなスペースが必要だということは分かりますよね。そうすると今まで公園と言えば子供を遊ばせる場所という理解だったものが、非常時に重要であってなおかつトイレも必要であり緊急にトイレに活用できるべ

ンチだとかを備え付けたものがかかなり広いところにあればいいと。今までは水が重要と言われてきましたが、ペットボトルがありそれなりに届くんですね。でもトイレはそういうわけにはいかないのが大事だということが見えてきた。そういうように事前復興的なテーマで何がやれるかというのが非常に重要なテーマです。

それからもう一つは、いろんな計画を立てても市民からはいろんな要求があるので、例えば、突然計画が出てきたら知らなかったというだけで反対され潰されるということがあり得ます。以前は優秀な官僚が一番良いという案を秘密裏に作成しこれでやれと言えばよかった、戦災復興などそうですね。ところが今それをやると逆に情報公開がないとかいろんなことで潰されてしまう。だから合意形成を図って、プロセスを踏んでいくことが中身の合理性と同じように重要になっている。ある意味合意形成のプロセスそのものをデザインしていくみたいな、欧米では本当にそんな感じで、結局は裁判が起こるんです。そうすると公共事業も全然動かなくなってしまうので、みんなが合意したということをやちゃんと形として決めて行って、ノーと言った人に対して、ここでこういうふうに決まったのに何故その時ノーと言わなかったのかとちゃんと争える、争いになった時に受けて立てるようないろんな手続きをやって、デュープロセスと言いますが、そういうものを作り上げていく。それを単に自分の保身のためにやっているのではなく、みなさんのためにやっているということを知ってもらえるような情報のアウトリーチも含めてやっていくような手法、ですから非常にソフト化してきているんです。ハードもあるがその背後には非常にしっかりしたソフトの手続きもあって、みんなが参加している形に如何に持って行けるか。

そこが非常に大きな課題になってきています。

前者の大学の立地と役割についてですが、大学の一番の機能は人材バンクとしての機能だと思います。その地域で議論をして何か相談をしようとするときに先生という人材があって、また学生も動員してやれるという意味も含めて、リソースがある。都心を再生させないといけないという時に大学が都心にサテライトオフィスや研究室を置いて作業や講義をやるとか、もしくは学生が若い目でまちに対してコミットしていくとかが非常に都心にとって力を与えてくれるということがある。ですからシンクタンク、人材バンクという意味が非常に大きいと思われまます。それで、物理的な空間のことを言うと、それぞれの大学で多様ですよ。大学は基本にお城跡や武家地などの公有地や軍の跡地に立地しているものがあって、そこに居続けるところもあれば、また郊外に出て行っているところもあります。だから大学によって都市の空間において果たす役割はそれぞれ違って、一般論として言い難い感じがします。ただ言えるのは都市にとって若い人達がいることは重要なので、また、これから社会連携だとか社会人教育とか社会人大学院とかそういう人達へのサポートは非常に重要な大学の役割であり、やはり都心に戻るといのは大きいんだと思いますね。

(石塚)

生涯学習という機運で知的欲求に応えるために「高知大」も「高知工科大」も高知市内に機能の一部を置いているんですが、「高知大」の場合は一時期、もっと市内の方に移すというような話もあったようです。市長さんの任期の問題など政治的なことやアパート経営している方や飲食店の反対などある中で難しかったのですが、大学の移転は今形成されてい

る空間を壊す形になるので、一度壊れてしまわないと難しいのかなと思ったりしています。

(松木)

東京だと厚木とか電車で1時間半かかるようなところに移っているけど、四国の都市にある大学は元々そんなに中心地から離れてはないですよ。私は、今の場所でも十分機能できると思います。だから、今まで言われていたような政治とかのファクターではなくて、住民の住みやすさだとか新しい産業を持ってくるとか、非常に複雑な状況で、前のようにできないので合意形成の中でその都市の中核的な大学が果たす役割は大きいだろうと思うんです。

(近森)

うちの大学は小さいですが、それでも1000人くらいいるわけです。そうすると人口5万人の鳴門市にとってはいろんな意味で貢献しているといえますね。鳴門市がどう思っているかは知りませんが。

(松木)

たぶん「鳴門教育大学」も尊重されていますよ。今ある大学はすべてその地域にとっては重要ですので、そこの方々が将来ビジョンを言って合意形成の中核になるというのは、今仰られたように人材として意見を創っていくうえでも重要ですよ。そういう意味ではやりやすいのではないかと。東京でなんかやろうとしても非常に難しいですよ。

(石塚)

合意形成のプロセスづくりは非常に難しいですよ。

(西村教授)

例えば、ワークショップというやり方がありますよね。楽しくいろんなものを議論するノウハウがすごく高まってきていますよね。道具を使ったりして面白くやれる。例えば、近所に公園を作るけどどういうものにするかという、みんなで模型を作ったりしてやっている。そうすると見て分かるし楽しいし、議論をしていくと、例えば公衆便所をどこに置くかとなると自分の家のそばには置きたがらない。しかしもっと魅力的なものセットにすると文句が出ないようなこともあります。このように議論をしていくと流れができてくるんですね。その流れをもう一回具体的に制度の中で専門家の手を通して絵を描くとこんなふうになると再提案をすると、みながるほどねという感じになる。そういうプロセスをいろんなところで踏んで行くと、合意のプロセスをデザインするということになる。それを何回か繰り返してある程度まで話が進んでいくと、反対する人が「知らなかった、聞いてない」と言うことがよくあるんですが、何回か話し合いに参加している人達が怒るんですね。ちゃんと参加するように呼びかけを行っていれば、参加していないのに何を今さらと参加当事者が言い始めるんです。今までは行政対住民ですから言われると行政が何とかしないとイケない。一人でも反対がいると行政がそこに大きなエネルギーを注がないとイケない。でも合意形成のプロセスを踏んでいけばみんなで作ってきている感じなので仲間がいるわけです。反対している人は行政側には税金払っているのになんだとか言うが、住民側が決めてきたことについて、あなたが出てきてないのに何よと言われればなかなか反対できないということになりますよね。そういうことで、次のレベルの合意に達するような仕掛けが少しずつですがいろんな分野で

できてきているんです。ただ、楽しいことが出来るんだっいたらいいけど、ゴミ処理場といったみんなが嫌がる施設などはやりにくいでしょうね。その場合は別の工夫がいりますが。

さっきの話で大学の役割ですが、たぶん文科系の学科や研究室でまちなかにサテライトを持っているところはこれから増えるんだと思います。商店街にとっては自分たちのためになることをやってくれるのだからと、お金を取らずに貸してあげるところが出てきています。大学でもまちが教材になるのであればやりがいもありますよね。まずは実験的にそのフィールドでカリキュラムを組んで商店街と交渉してやればできないことはないですね。

(近森)

いくつか四国でもありますね。まちおこしプロジェクトとしてやってますね。講義の一環で商店街の一角の空いている店を借りて取り組んでいますね。

(西村教授)

そういうふうにまちなかのラボが大学の社会連携として地域に対して開かれ、カリキュラムを持っているということ自体が地域にも対文科省にも評価されていくんでしょうね。

(釜床)

四国の都市周辺の農山村、漁村、また離島と都市との関係が将来どうなるのか、最近、離島に住んでた方がどうしても島を離れなくてはならなくなって人が少なくなっているとか、魅力を感じることも難しいということでもいろんな動きが出ている。これからのライフスタイルとの関係でどんな生き方があるのだろうかと考えていますが・・・。

(西村教授)

大きな流れとしてこれから田舎暮らしがあると思うんですね。20世紀は大都市が文化の源泉だと思われて都市化の時代と言われました。今は都市も都市化を目指すということがなかなかできない時代になった。全体が都市になってしまっている。生活そのものが。どこでも同じ情報が取れるようになってきた。本当に大都市に行きたければ容易に行けるわけで、情報を取ったりそういうところでないといけないようなものはやろうと思えばやれるようになった時代。そうすると、今まで一番やれなかったことは田舎にこそある文化、自然、子育てにも良い環境とか、これから関心が広がってくると思うんですね。たぶん二地域居住ですね、都市的な生活と田舎とを行き来するような生活になるだろう。空き家が多いのでそれがうまく使えれば、平日は都市的生活を送り休みには田舎で暮らすことができる。今まではそういう生活は金持ちだけの世界だと思ってきたが、これからは二地域居住がごく自然なことになってくると思うんですね。

そういうふうに思うと都会的でないところがはるかに良いと思えてきて、今は一番苦しいところが一番魅力的なところになるかもしれない。東京でそういうことをやろうとしても混んでいる。週末にどこかに行っても帰る時に20キロ渋滞などになってしまうわけです。そんなことがたびたび起こるとそもそも行く気がなくなる。やりたくてもできない。しかし、四国ではそれが普通にできる。そういうメリットがすごく活きるころだと思います。

(兵頭)

都市の規模について、ヨーロッパのような自立型のいろいろな規模があるというお話が

ありましたが、産業の集積が非常に重要だと思います。産業を呼び込む吸引力と都市の魅力、あるいは位置づけをどう考えたらよいか。事例があれば教えて欲しいと思います。

(西村教授)

産業といってもいろいろありますが、工業といった物流がベースになる産業は高速道路の幹線沿いとかのアクセスがしやすいところ、東北縦貫道の南のところにありますよね。そういうところは若い労働力もあるし。

また、大きな産業は港があるところにありますよね。愛知や九州北部の車産業ですね。九州北部の場合、まちの規模は大きくない。北九州市（人口98万人）と大分県中津市（人口8.6万人）の間にある市町で、苅田町（人口3.6万人）、行橋市（人口7.3万人）、豊前市（人口2.7万人）とかね。聞いたこともないでしょう。そこに非常に大きな自動車工場の集積があるんだけど、小さなまちです。裏側（内陸側）は山ばかりで自然が豊かなんです。大規模都市でなくても力を持っているんですね。こういうところを考えると農村的な自然も豊かでなおかつ工場都市というのもあり得るんですね。北陸でも富山県などにもありますね。そこらは大きな都市ではないですね。そういう意味では製造業が立地し、農村的な生活も満喫しながら生活できる場所はあるんですね。様々な産業があるので、それだけではないですが。大都市でないと成立しない産業、IT産業とかもあります。そういう産業は都市の魅力があると大都市でなくてもいいですよ。

(安藤)

「一太郎」の会社はまだ徳島にあるんでしょうか。

(近森)

前は私の家の近くにあったのですが、あるのかなあ(※)。それより、山の中の徳島県の「神山町」とかはサテライトオフィスを置く企業がありますね。インターネット環境が良いので場所の魅力から来ている。災害対策ということもあるかもしれませんね。

※事務局注:「ジャストシステム」の第32期有価証券報告書(H24.4.1~H25.3.31)によると、従業員数は428人で、徳島本社115人、東京支社263人、5営業等28人となっている(最大の従業員数は平成20年3月末959人で徳島本社355人)。平成25年8月9日付け徳島新聞によると、8月19日付けで本社機能を東京支社に集約(登記上の本社は徳島市に残す)とあり、今後、徳島の雇用者は減少予定。また、徳島本社の空フロアには、現在、「大塚ホールディングス」の事務処理センター、「大塚製薬」の特例子会社、「NTTマーケティングアウト」のコールセンターが入居。最近の業績は、8四半期連続して最高益を更新中。

(松木)

さっき言われたようにどんな産業を考えるかによって場所も変わってくるということでしょうね。

(西村教授)

災害時のバックオフィスとしてサポートできるかどうかもすごく大きいですね。

(松木)

従来型の工業的なものについては都市との関係はすごく薄くなって別なファクターが動いているし、次の産業を興すとなったら優秀な人材が必要で、その人が住みたいと思う場所で産業が興ると思っています。だから魅力

あるまちを創っていくことが産業を呼び込む一番のファクターだと思っています。

(近森)

ですからITというのはこれからいろんなことを変えていくのではないかと思いますね。極端には、道路はいらないという話になってくる・・・。

(松木)

ただ、ものは必要だから道路はいるのは・・・。

(西村教授)

今、東京の近郊で何が一番動いているかというと、物流の倉庫業なんです。宅配便などすごい勢いで伸びてますよね。

(事務局)

予定の時刻も過ぎておりますので、恐縮ながら意見交換終了とさせていただきます。本日はありがとうございました。

第5回WG検討会

◆講師紹介：松場登美 氏

<プロフィール> 石見銀山生活文化研究所／群言堂HPを参照

1949年：三重県安芸郡芸濃町生まれ

1981年：夫（松場大吉）のふるさと大森町（石見銀山）に帰郷。

実家・松場呉服屋の片隅で布小物の製造、販売を始める。

1989年：築150年の古民家を修復し店舗をオープン。

以来、数軒の古民家を修復し生活文化交流の場として活用。

1993年：女性による女性のためのフォーラム「鄙のひなまつり」を10年間主催。

1994年：服飾ブランド「群言堂」を立ち上げる。

1996年：国土交通省・都市地域整備局より、地域アドバイザーに任命される。

1998年：株式会社石見銀山生活文化研究所を設立。所長就任。

2003年：NPO法人「納川の会」（のうせんのかい）発足。理事就任。

国土交通省・観光カリスマ百選の1員に任命される。

2004年：国際交流基金派遣事業にてインド・ブータン視察。

2006年：文部科学省・文化庁より文化審議会委員に任命される。

2007年：経済産業省・地域中小企業サポーターに任命される。

内閣官房・都市整備本部より地域活性化伝道師に任命される。

2008年：日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2008 総合3位」受賞

株式会社他郷阿部家を設立。

2011年：株式会社石見銀山生活文化研究所 代表取締役所長に就任。

<著書等>

『群言堂の根のある暮らしーしあわせな田舎石見銀山から』（家の光協会、2009年）

『起業は山間からー石見銀山 群言堂 松場登美』（森まゆみ著、バジリコ、2009年）

2. 第5回WG検討会

①松木所長挨拶

松場様、今日はありがとうございます。

「四国・住みたいまちに生きる」ということで5回目の開催になりますが、今回で区切りをつけてまとめようかなと思っています。この後どうしていくかは皆さんとご相談しながらですが、そもそもこの検討会をスタートさせたのは、研究者の人達は将来の社会に使ってもらいたいと考えて最先端の研究をしているわけです。しかし、一体どういう社会を想定して研究しているのか、想定する社会そのものを議論することはやらない。昔は高い技術とか新しい技術とかを出せば、良い幸せな社会になれるということが無条件に信じられる時代があったわけですが、現在はなかなかそういうことが難しくなってきた、一体何のために研究してきているのかを研究者、大学の先生たちが考えていかなければならない時代に来ていると思ひまして、そういうことを一度議論してみたいと私自身思いましたのでこういう会を始めさせていただきました。



「四国・住みたいまちに生きる」というタイトル自体は、四国に関係のある方々、生まれた方々に限らず私のように東京から来た人間もそうですが、四国という場所に住んでいることを考えたときに、四国がどうなってもらいたいかということと、自分の経験がどう活かされて欲しいかということ、いろいろな分野の方々に集まって議論していただき

いと思ったことと、生活に関連する都市工学や地域の活性化に取り組まれている方々からお話を聞いて、参考にして議論を深められたらと考えております。

元々終わりのない議論ではあるのですが、どこかで区切りをつけないといけないので、今回2回続けて外部の方のお話を伺いましたので、それを含めて意見をいただき中間報告としてまとめさせていただければと考えております。

松場様には本日楽しみにしております。是非とも活発な議論をいただけたらと思います。よろしく申し上げます。

②松場登美 株式会社石見銀山生活文化研究所 代表取締役所長 講演

<演題>

◆足元の宝を見つめて暮らしを楽しむ◆

松場でございます。今日はよろしくお願ひいたします。

ご紹介いただきましたが、私自身は過疎の寒村に嫁ぎまして、特にデザインの勉強もしたことがない人間がデザインを仕事にすることになりまして、今日は恐縮しております。研究者という立場でもなく深いお話はできません。講演というより事例報告ということでお聴きいただくとありがたいと思います。その事例も失敗事例と申しますか、失敗の連続でございましたが、我が社は創立して今年25周年を迎えました。どん底で立ち上げた中で、よくここまでもったものだと思っております。奇跡の連続であったといつも思っておりますが、その失敗事例をお聞きいただければありがたいなと思ひます。

同じ島根県に木次乳業という会社（事務局注：木次乳業有限会社：雲南市木次町、乳製品の製造・加工販売・酪農・その他）がござ

いまして、93歳になられる立派な哲学を持たれた方がおられます。「失敗のない人生は失敗でございます」という名言を言っておられて、私たちはある意味良い失敗をしてきたんだなというふうに思います。いつも足元の宝を見つめて暮らしを楽しむというお話をさせていただいておりますが、足元の宝を大切にすることが一番大切なんだなと思います。難しいことではなくて、真の仕事は人生を楽しむこと、石見に来ました時に、周りからは不幸な結婚をして行ったと見られたんですが、本人は非常に楽しく、こういう人生を送れると当時は思ってもいませんでした。



今日の検討会のタイトルに「住みたいまちに生きる」とありますが、住みたいまちになるかどうかというのは、自分の理想とする世界観とか基準とかをはっきり持っていないと見えてこないのではないのかなと感じております。そして今思いますのは、暮らしを見直す時代に、未来の人たちの幸せのために私たちは今何をすべきかということをお問われている時代に生きているんじゃないかなと感じております。

私は繊維の業界に永くおりますので、今日身に着けているのも全て自社のものですが、“糸偏”に関わる言葉として、「紡ぐ」「織る」「繕う」というこの3つをテーマにいつも話をしております。「紡ぐ」というのは、一本の繊維長は短いものでもそれを紡ぐことによっ

て“経糸”になり、「織る」というのは“日々の暮らし”だと思っておられて、一日行って帰ってくるという、一度トンと打つくらいでは本当に目にも見えないような時間の展開ですが、ただそれを美しく豊かな暮らしをするかどうかで、その人の一生というものが決定されるのではないかと。また、「繕う」というのは、まさに“再生”という言葉につながるんですが、夫とともに町内に8軒の民家を再生してまいりました。ものを作る仕事が生業とすれば、人生を賭けた仕事の一つとして“民家再生”という仕事をもらったんだなと思っております。

“経糸”の中に“日々の暮らし”を織り上げる。隣に“仁摩サンドミュージアム”というのがあって、そこには大きな砂時計があります。時間というのはとかく過ぎ去るものだと考えがちですが、あれを見ていると時間というのは過ぎ去っていくものではなくて蓄積していくものだなと思います。その蓄積そのものがその人自身の人生になるのではないのかなと思っております。

これが石見銀山です（資料1）。



こんな山奥の谷あいの一筋にある集落ですが、今人口410名、全校生徒が20名、孫が通っている幼稚園が5名、来年は3名になるということで、昔で言えば兄弟の数よりも少ない園児数になります。閉山後の鉱山のまちが

過疎化、高齢化という道を辿るのと同じように辿ってきました。



私は30数年前に来ました。やっと世界遺産となって“いわみぎんざん”と呼んでいただけますが、当時は“いしみぎんざん”としか呼んでもらえなかった時代です。私は夫より4つ年上で、夫の学生時代に子供も生まれて結婚しました。兄弟からは、「昔は、罪人は佐渡の金山に島流しだったけど、お前は罰が当たって国流しだ」と言われました。親が形ばかりの結婚式は地元で挙げてくれましたが、その時親戚筋のおじさんから贈られた言葉は、「草の種はたとえ落ちたところが岩の上であっても根を下ろさなければならない」という大変厳しい言葉でした。しかし、そこが岩の上か自分を育ててくれる豊かな土壌なのかは自分の心持一つだなと思いました。そしてこの仙山（せんのやま：538m）の中腹から見下ろす風景が大好きで、ここに来ると、“大丈夫、ここならやっていける”という気持ちになり

ます。周りからは不幸な結婚と思われましたが、本人はワクワクしておりました。当時はまだ重伝建（重要伝統的建造物群保存地区）にもなっていませんでしたし、世界遺産はまだ噂にもないような過疎のどん底でしたが、ここには自然、歴史があるし、仲の良いコミュニティがしっかりしているので、こんな恵まれた所はないと思いました。



さっき紹介の時、西村先生（事務局注：西村幸夫、東京大学教授、第4回WG検討会ゲスト）のお名前が出ましたが、20数年前石見銀山で講演なさったとき、一冊の本をくださって、その本がイギリスのトラスト運動の本でした。民家再生という仕事は、その時きっかけをいただいたわけで、廃屋は全て財産だと思うようになったわけです。西村先生とお会いすると、「先生とお会いしたことで私は大きな借金持ちになりました」と嫌味を申し上げるんです。世界遺産になるときに私と夫は

世界遺産の価値があるのか、また世界遺産がこのまちに幸せをもたらすのか大変疑問に思っておりました。ですから世界遺産を目指す会議には一切声も掛からない状況でしたが、世界遺産登録になるときに西村先生からメールでメッセージが届きました。「ご夫婦はがっかりしているかもしれない。でも折角登録されたのだから、そこらの世界遺産ではなくて、石見銀山の生き方産業、つまり“ライフスタイル産業”と名前を付けたけど、会社はアパレルでもなく雑貨業でもなく、この夫婦の生き方そのものが産業を成している。イタリアの小さな村からアンチファーストフードに端を発して、世界中にスローフードという言葉が広がったように、あなたたちが目指すライフスタイルが世界標準になるくらいのを発信して欲しい」という大変名誉なメールをいただきました。そして後に私は“阿部家”という宿の経営に乗り出すわけです。

当初、県は、銀山では世界の三分の一の銀を産出したということを大変押しにしていたんですね。しかしそのことが評価されたのではなくて、石見銀山は鉱山遺跡と自然との共生、そして文化的背景というのが付いて世界遺産になりました（事務局注：2007年7月に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として登録）。これは大変皮肉なことながら、鉱山としては近代化に乗り遅れた、また、閉山後どんどん過疎化して重伝建に指定されて街並みが残った。もしここが経済発展していたらこのまちは残らなかつたらという皮肉なことがプラスに働いたということは、私たちに大変大きな示唆を与えてくれることになりました。最近“秋田美人”に代わって“島根美人”と呼ばれるようになったそうです。これも何が要因かと言うと、湿気が強いことと日照時間が短いことでそう言われ出したそうで、これもマイナスがプラスになったという大変皮

肉なことですが、私たちはマイナス面がプラスになっていくこの時代の価値観の変化を正に真っ向から受けているんじゃないかと思っています。

そして、これが本社です（資料2）。



アパレル業界でご飯を食べている会社ですが、石見銀山生活文化研究所という社名にしました。夫が真面目な顔をして松場家の家訓について話すので大した家訓があるかと思いましたが、“つぶしが利く”が家訓だそうです。「つぶしが利けば何をしても生きていける」ということで、この社名にいたしました。そして私たちはここに社屋を造る時に、一般的には鉄筋だつたりいかにも社屋というものが造られますが、土地の声を聴くとか、土地の神様と相談するという言葉に倣いました。私たちはこの田舎の原風景を壊さない社屋が造れないかということで、まず広島県から茅葺の家を移築しました。そして畦道を造りました。また橋を、石積みの小川を造りました。それから6年後にやっと後ろの社屋を造りました。茅葺屋根の奥に見える社屋の瓦は石州瓦で、登り窯で焼かれたものです。20数年前のものが残っておりまして、それを買わせていただいて葺いたものです。

「人は人生の岐路に立ったときに、いつか見た風景に慰められることがある」と言った

人がいます（事務局注：星野道夫（ほしの みちお）、1952年9月27日 - 1996年8月8日、写真家、探検家、詩人）。風景の美しさが故郷の心を育むのではないかと思います。宇宙飛行士の方が言っていたことが新聞に出ていました。「宇宙に行くまでは故郷（くに）はどこだと聞かれると東京だとか自分の出身地を答えていたが、最近は故郷は地球だと答えるようになった」と。宇宙から見た地球の美しさに感動されてのことだと思います。

これが茅葺屋根の移築の時です（資料3）。



1748年、徳川吉宗の時代のものでから265年経過しています。この建物は3度目の移築だそうです。ある方からは、「3度も移築する価値のある家がなくなってきた」と言われました。また、ドイツのカールベンクスという建築家は、「日本人はダイヤモンドを捨てて砂利を拾っている」と大変皮肉なことを仰いましたが、現代建築は35年しか持たないような家を建てていると聞きました。私たちは、「ものを残すことによって技術が残る」ということを大事にしたいと思います。私たちは、この織機がなくなるとこれは織れない、この職人がいないとこの染めはできないという素材を求めてものを作るように努力しています。

私は三重県出身、夫は島根県出身、今年は両方併せてご遷宮の年です。伊勢遷宮の御杣

山（みそまやま）の木を伐り出すそうですが、線が一本記された木は100年後に伐る、二本のものは200年後に伐るように育てているらしい。自分の代には役に立たないものを育てる、孫や子孫のためにとなされているということで、私たちが今の自分の時代よりも子孫のために何ができるかということをお大事にしていきたいと思っています。

これが完成したのちの社屋です（資料4）。



日本昔話に出てくるような感じです。

畑には吉田正純という鉄の彫刻家の作品がありますが、彼の作品は野に在って美しいと思います。彼のモットーは「鉄は朽ちるから美しい。全ての自然のものは土に返っていく」であり、その鉄の表現が素晴らしいと思います。

これは縁側ですが（資料5）、小春日和の頃は社員が縁側に出て食事をとります。社員食堂は、地域の方々とか学生さんにも使っています。



社屋の中は来訪者が驚かれますが（資料6）、



外観とのギャップです。近代的な設備が整っていて、ヨーロッパでは当たり前のことだと聞きますが、日本では珍しいと思います。高齢化の進んだまちに若い社員が多い。この本社の中は平均年齢 35 歳、この過疎のまちに都会から若者が働きに来るようになりました。

私はデザインに関して全く独学ですが、何をデザインしたいかと言うと、単にものではなくて、考え方、暮らし方をデザインしたいと思っています。食べるために台所で子育てをしながら針一本でツギハギして、それをワゴン1台で行商して歩くということからのスタートでしたが、某有名デザイナーが、「デザイナーは人を幸せにする仕事なのに、今は経済を加速するような仕事になっている」と言っています。私は、デザイナーとして幸せなことと思うのは、消費者の価値観に影響を与え、その結果、一人ひとりの消費者の変化によって社会を変えていくことができるんじゃないかということです。

ある友人からメールで、「消費は未来への投票である。100 円のハンバーガーがある一方で、道の駅ではとなりのおばあちゃんが 100 円のおにぎりを売っている。同じ 100 円を出すならあなたはどちらを買いますか？」という投げかけがありました。ビジネスは一つの価値観を世に問うことのできる仕事ではないかなと思っています。そういう意味で、ダイ

レクトメールは社員や町内の人をモデルにしています。

これは「げたのは」という素朴なお菓子を売っている有馬光栄堂のおじいちゃんとお孫さんが「根根」（ねね）という娘世代のブランドのシャツを着ています（資料7）。

“おそろいは家族のしるし”という文章を付けて、ここにしかないここでしかできないダイレクトメールの制作をしています。



そしてデザイナーとしては流行は追わないけれども時代性を捉える、数年前のものを古く見せる必要がどこにあるのか、だから“群言堂”の服は 10 年経っても 20 年経っても着られる服を作りたいと思っています。

これが社屋の前の風景です（資料8）。



この春に出会った言葉は、“桃李言わざれども下自ずから蹊を成す”という司馬遷の言葉でした。私はそれを知らずして長女の出産を機に孫のために李の木を植えました。その向こうには桃の木があるのですが、正に桃李である桃と李の木を植えていたわけですね。桃李は何も言わないけれども美しい花を咲かせ、美味しい実を成せれば、そこに自然と人が集まってきて、道ができるという素晴らしい言葉でして、正に私たちはビジネスの上でもこの言葉どおりのことをしていきたいと思っています。

大量生産、大量消費、それから安価なものづくり、海外生産をすればウェアは十分の一で生産はできます。しかし、そんなに大量に作る必要があるのかということと、また、低価格の背景には貧困な国の環境や人々の犠牲のものがあって成り立っていることを私たちは知るべきではないかと思っています。

そして私たちは、景観を損なわないために縦が 60 cm くらいしかない社名の看板を畦道に立てているだけです（資料9）。

社屋といえども大きな看板は立てない。私が出会った言葉に“犬馬難鬼魅安易”（けんばむつかしきみやすし）という言葉あります。これは中国の言葉ですが、白洲正子さんの「武相荘」（ぶあいそう）の玄関にもありますが、



皇帝がお抱えの絵描きに何が描きやすいか、何が描きにくいかを聞いたところ、「犬や馬のように当たり前に目の前にいるものを描くのが難しい、しかし化け物とか鬼とかは簡単だ」と答えたそうですね。ビジネスというとかく昇り旗を立てたりとか大きな音楽を流したりとか通りにワゴンを並べたりとか派手派手しくやりがちですが、私たちは“犬馬難鬼魅安易”という言葉に学んで店を作ることにしました。これは時代の価値観と申しますか、私は今 64 歳ですが、経済発展の真ただ中を育ってきました。何がないからという足し算足し算の人生でしたが、私はある意味引き算が必要ではないかと思っています。

夫の父親は地元の商工会の会長をしておりました。そしてたばこ、塩、切手の販売と併せて代々呉服屋を営んでいました。夫の父は、このまちで最初に自販機を置いたことが自慢だと言っておりました（資料10）。



勘当した息子でも、帰ってくるんだからと言って窓にはサッシを入れて迎えてくれました。しかし、私たちは親不孝なことに、自販機は取り除き、モルタルは剥がして土壁に直し、サッシは取れないので障子と雨戸で隠すというふうに変えていきました（資料11）。



そして真向いの空き家を買って求めて“群言堂”の本店を造りましたが、今世界遺産になりまして、ガイドさんが前を通ると、「この店は東京にも福岡にも京都にも大阪にも店があるんですよ」と大変誇りに思ってくれるんですが、私は内心、ここに本店があることが誇りと思っています。高松は三越さんにも出店していますので、またよろしく願いいたします。

そしてこれが招き猫と申しまして、正に招き猫でして“キムチ”という名前を娘が付けました。少し障害があるのですが、ペットショップでタダで貰ってきたものです（資料12）。

呉服屋時代のこのウインドウが気に入ってここにいつも寝ているんですね。私は後ろに



“果報は寝て待て”と掛け軸を書いてやりましたが、娘が書いた文章が面白くて、「私キムチと申します。縁あってこのまちにやってきました。猫の立場で申しましてこのまちはとても素敵なまちで住みやすいまちです。木陰もあるし、そして誰もかもが顔見知りなので逃げたり隠れたりいたしません。あれは都会の泥棒猫のやることです。そして最近の人間は何かというと忙しくて猫の手も借りたくないほどと申されますが、決して貸してあげません。これは猫の文化ですから」みたいなことを延々と書いています。世界遺産になりましてから観光客が来ると、この“キムチ”が寝ているところを、「起きて、起きて！」とドンドンとガラスを叩くんですね。それで私は、「お前たちこそ目を覚ませ。ここは僕の暮らしの場なんだ。マナーを大切に守れ」というようなことを書いたんですね。でも“キムチ”はこの7月に亡くなりました。人間で言えば85歳相当で寿命を全うしたと思います。今思うと私たちは“キムチ”を名乗って世に申したいことを言ってきたつもりが、実は“キムチ”が私たちを使って言っていたのではないかというようにさえ思いました。

さて、民家再生の第1号は、夫が20代後半、私が30代前半でして、この家を買うのに、夫は銀行で一生一代の大はったりを言ったと申しましたが、その後22年の間に町内で8軒の民家を再生いたしました。



そして9軒目を買いました。この民家再生が私たちの大きな仕事になっていくわけですが、この荒れ果てた庭が、今はこのように変わりました（資料13、資料14）。



全て改修は廃材を利用してきました。そして便利というよりも、効率性というよりも、非効率なことを大事にしながら店を造ってきました。店というよりは人の集まる場所づくりというか、流行のものがあるとか品揃えがいいとかではなくて、あそこは何かホッとする、また行ってみたいと思われるそんな店を造りたいと思いました。中庭があることがこの店の一番の宝なんです。里山の美しさをここに残したいと思い、草が生えていても完全には取らずに、自然と人間が美しく折り合っている空間にしました。ここにテーブルがあります。『草花テーブル』といって、真ん中にコケを乗せました。そうしたら、次から次へと草が生えてきて、夫がいつも言うのです。「コンピュータは入れたものしか出てこん。でも自然は風が、鳥が運んだものか分からないが、これだけの恵みが出てくる。自

然はスゴいな」と。

これはこの家にあった玄関のガラス戸です（資料15）。2枚入ってまして片方は無傷ですが、1枚はガラスが割れていたんですね。これを近所の奥さんがステンドグラスで直してくれました。“繕いの美”と言っていますが、どちらかというこの繕った方が魅力的で、ここに物語が生まれる、また新しい価値が生まれるものだと思っています。



そしてこれが藤の花ですが（資料16）、



実は盆栽だったのですが花が咲かないということで捨てると言われたものを、もらってきて土に戻しました。6年間は花は咲かなかっ

たんですが、でも7年目に1つの真っ白い花が咲きまして、諦めないということが大事ななと思いました。ですから、今日の話は諦めなかった話であって、成功した話でなかったことをお断りしておこうと思います。

これまでも何度思ったことか分かりません。低空飛行でじわじわと続けるというのが、山を作ってはいけないというのが夫の経営方針ですので、本当に厳しい利益の薄い方法ばかり選びます。経営も厳しいのですが、夫は「大丈夫。うちは神風が吹くんだ」と言いまして、テレビの「ガイアの夜明け」に取り上げていただいた時には（事務局注：テレビ東京 2006年5月30日放送、「地球を守るビジネス、あります」）、もう会社もこれまでかという時でしたし、また、ベニシアさんの「猫のしっぽカエルの手」という番組※に取り上げていただいたときも大変厳しいときでした。また復帰しまして、これが私たちの神風が吹くということかもしれません。

※事務局注：「猫のしっぽ カエルの手」

2009年4月5日からNHKで放映。イギリス出身のハーブ研究家であるベニシア・スタンリー・スミスが、地域の人々の暮らしや風土、そして自らの料理や、ハーブを使っての様々な手づくりを紹介する番組。Vol. 59「再生のよろこび」（松場登美）と題してBSプレミアムで2011年5月13日に放映。

伝建地区の中に一番質素で一番粗末な家がありました（資料17）。私たちはそこも買い求めまして、夫の提案として、文明を一切排除しようと。文明が発達すれば人間は幸せになるのだろうか、本当に豊かになるのだろうか、実験の建物としてこれを造りました。まち一番の質素な家でしたが、文明に頼りすぎた暮らしは危ない、五感の蘇る家として15年

前に造りました。



家の中はこのように囲炉裏と和燭の灯りだけでお酒を飲みます（資料18）。



ここは“無邪く庵”、“思無邪”という額縁を掛けたことから“無邪く庵”＝“邪なことを思わない”という名前にしました。そこに入るとどんなに立派な肩書を持った方も素の人間に、たった一人の人間になる場所だと思っています。

正に培われた日本の美意識がこういうところにあるんだと思いますし、質素儉約とか無

駄なこと浪費をしないとかな簡素の美とかいうものが日本の美ではなかったかと思いますが、今や過剰なものを求める人間の欲というものが世の中を変えていったのだと思います。

白洲正子さんの本を読みますと、「西洋の花のように山盛りに生けるのは簡単だと。しかし、日本の花のように、椿一輪、水仙一輪生けることの方がよほど難しい」と言っておられますし、また、俳句にしても五七五という短い言葉の中にすごい情感を表現できる、日本の文化というものはそういうものではないかと思います。

さて、これは7軒目の民家再生です（資料20）。



1789年、寛政元年に建てられた家です。224年経っています。湿気の強い山陰の山奥で30年間空き家でしたので、痛み様は本当にひどいものでした（資料21）。



こんな家は直すよりも壊して建てなおした

方が早いと誰もが言いました。しかしこれを改修して今は宿にしています。

買い求めた時どんな状況だったかと言うと、こんな状況で天井や床が抜け落ちていました（資料22）。



また建具はボロボロでまるでお化け屋敷のようでした（資料23）。



いつもお泊りになった方に、この Bifore & After をお見せするのですが、夜お見せした方がいいのか朝にお見せした方がいいのか、度胸しただいと判断しています。

この台所をご覧ください（資料24）。



後でどんなに改修したかをご紹介しますが、どんな立派な家でも人が住まないダメになる。人が住んでいて手を加えていくと蘇るんです。傾きを直すために全部の土を取り除きました。



そして“根継ぎ”という方法ですが（資料28）、使えるところは使って廃材利用で直して行きました。私たちは隣町の廃校になった小学校を一棟買い求めてまして、近所の人が捨てたものを拾って、そこにストックしてあります。



そしてこれが外壁です（資料29）。



今や土蔵造りのできる職人さんは少ないと思いますが、石州左官は全国的に腕が良いことで有名です。貧しかったからこそ、職人の技が磨かれたという背景があります。出雲や松江は裕福だったからそこで暮らしていられたんですが、石見はとても厳しいところでしたので、みんな関西の方に仕事に出たんですね。そして寺社仏閣の建築に携わって帰って来たので、石見には腕の良い職人が多いと言われてきました。ただ最近聞くところによりますと、左官職人の仕事が無くなってきて左官という職業が無くなるんじゃないかと言われてます。

そして、ボロボロだった玄関は、今はこのように変わりました（資料30）。私はこの家を“暮らす宿 他郷阿部家”と名付けました。もう一つの故郷、また不思議の縁という意味があります。私はよく「阿部さんですか？」と聞かれることがあります。



私たちは8軒民家を再生しましたが、本店の”群言堂”以外は全て”竹下家”とか”新居家”とか、元の持ち主の名前で呼ぶようにしています。歴史の中でその家に敬意を払うというのが大事だと思いますし、私はデザイナーとして理想のライフスタイルをこの家を通して表現していきたいと思いました。分不相応な投資をしましたので、宿にしても採算が合わないことはよく分かっていました。でも、その時出会った言葉が、「道心求めれば衣食あり、衣食求めれば道心なし」という言葉で、“道を求める心、つまり志があれば衣食＝利益は付いてくる、しかし利益を求めると道を失いますよ”という言葉でした。志を持っていればいつかは食べていけるようになるということと、この家を使って次世代を育てたいという大きな目的がありました。その言葉を信じて6年になりますが、まだ未だに赤字です。来年くらいに黒字に転換する兆しがちよっと見え始めています。

そして財産というのはお金だけではなく人の出会いも大きいと思うようになりました。こんなボロボロだった家に有名な方もおいでになるようになりました。あのボロボロの家からすると、今想像もつかないことが起こりかけています。

高知出身の90歳で亡くなった、私の最年長のボーイフレンドの大脇健一さん（事務局注：元富士通取締役、広島工業大名誉教授、

2001年4月4日高知で死去）という方が、“復古創新”という言葉を与えてくれました。“温故知新”という言葉もありますが、私たちは古い中から未来を創造することができるのではないかと思います。未来は新しいことばかりではなくて、過去の古いものの中に未来が見えることがある。「懐かしい未来」という書を書いた方もおられますし（事務局注：ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ（Helena Norberg-Hodge）、スウェーデン生まれ。ISEC（International Society for Ecology and Culture）創設者、代表）、また、宮崎駿さんの映画は「レトロフューチャー」と表現されたと聞きますが、私たちはこの家はただただ古い家というよりは、むしろ未来の家ではないかと思います。

先ほど申し上げた理想のライフスタイルというのは皆さんにお話すると誰もが羨ましいと仰られますが、夫とは仲良し町内別居というものをしております。夫が、「ここを宿にするのなら、あなた自身もここに住まないと本物にならないよ。まずは自分の理想のライフスタイルをここで創りなさい」と言いますので家を出たんです。体裁の良い三行半かなと考えることもありましたが、実は夫の枕元に置いてあったのは、五木寛之さんの「林住期」という本で、“林住期”というのは女も男も家を出て本当に自由に生きる人生のクライマックスであるとして書いてあって、私は正に今、人生のクライマックスに生きているんじゃないかとの思いでここに住んでいます。

先ほどのボロボロだった家ですが、奥座敷はこのように変わりました（資料31）、また、蔵の2階はこのように変わりました（資料32）。納屋はお風呂場にしました（資料33）。暮らしがあるるとこのように美しい風景も生まれま（資料34）。



そしてこの家の中心の火のあるところ台所は、私の一番の自慢ですが、このように変わりました（資料 35）。

全て廃材利用です。今、八百万の神のおら

れる島根県ですが、私はここは八百万の神がおられる台所だと言っています。



多神教の国日本は融通の利く臨機応変な対応ができる、ここが日本の一番素晴らしいところじゃないかと思えます。かつて、“イエス・ノーがはっきり言えない日本人”という批判めいた本が出たこともあります。イエスとノーの間に限りないグラデーシヨンのある答えを持っているのは日本の民族性であり、また、そこには相手に対する思いやりとか配慮とか、そういうことではないかと思っています。クリスマスをして除夜の鐘を突き、初詣をするというお国柄ですが、それが日本の素晴らしさだと思えます。先日、留学を前にした子供がいるご一家がこの家に泊まれて、「東京生まれの東京育ちの息子が日本を知らない。アメリカに留学するが日本を語れるようにしたい」ということで、薪割りから火吹き竹で火を起こし、ご飯を炊く経験をされました。

これが私の理想の台所です（資料 36）。



三女が子供をおんぶしています。向こう側には“まいちゃん”という初代の台所を賄った子で、23歳から26歳まで働いてお嫁に行きましたが、全く料理をしたことがない素人の子でした。今の2代目の“あきちゃん”も料理をしたことがない子でした。

私は母が台所で教えてくれた家庭料理が“阿部家”の台所の料理だと思っていましたので、宿にするときから料理人は置かないということにしていました。昔の女性の力というものは素晴らしいと思います。私の母は無学の人でしたが、料理を本当に上手に作ってくれましたし、生きる力とか子育てとかも、“もったいない”とか“ありがたい”とかいう言葉も常に教えてくれました。

これがこの子たちが作る家庭料理ですが（資料37）、今は“あきちゃん”という子がお買い物から全てやっています。26歳で1年半になりますが、40食（昼夜各20食）を一人で料理します。切ったり、盛り付けしたりは本社から応援が来ますが、それだけできる子になりました。



家庭料理は土地のもの、旬のものを使います。来年1月1日には「阿部家の台所」という料理本が出ますが、素人の地元の女の子の料理が本になるという不思議なことが起こるものだと思います。そして本の帯には、山形のイタリアンレストランの“アル・ケッチャーノ”の奥田シェフがここに来られたことが

ありまして、その方が、「“阿部家”での暖かい食事は、僕に人間が食べるという本当の行為を思い出させてくれた」と言葉を書いてくださいました。私は、「皆さん美味しい美味しいと言ってくれるのは有難いけれども、この食卓には魔法が掛かっているんですよ」と何時も言うんですね。

この26歳の“あきちゃん”は、初めての梅干しづくりをしました（資料37）。



「自給のある暮らしは体の中に造る文化を育て、外には美しい風景を紡ぎ出す」ということを言われた方がありますが、干し大根などこれから作ります（資料39）。



いろいろなお客様が来てくださって、今では10ヶ国以上の方がおいでになりました。そしていよいよ珍客の宇宙人まで来ていただきました（資料40）。また、地元には辛味大根という薬味の大根がありますが、絡んだ大根が採れたりします（資料41）。



です（資料 43）。今年 88 歳で、“まさよおばあちゃんの 88 足” という展覧会をお孫さんが群馬県で開かれました。



これは“ボロの美”、“繕いの美”とも言いますが、石州和紙の障子も破れるとこのように繕って楽しんでいます（資料 44）。

この家では本当に遊びながら楽しく暮らすということを大事にしております、また、世の中が捨てるもの価値がないというものを生かしています。これはあるおばあちゃんが新聞のチラシで折ってくれた鍋式です（資料 42）。この作り方をコピーして自社の 20 数店舗で無料で配布しています。



花も自然の花しか生けないんですが、庭のヤマブキの花をこういうふうには階段ダンスに生けたり（資料 45）、タケノコの皮にスマリを生けて楽しんだり（資料 46）、何もお金を使って花屋さんで買わなくても足元にたくさん宝物があるということをこのように楽しんでいます。

また、これもインターンシップで来た“まさよおばあちゃん”が、お世話になったということで、虫食ったセーターとか縮んでしまったセーターを解いて編んでくださった靴下

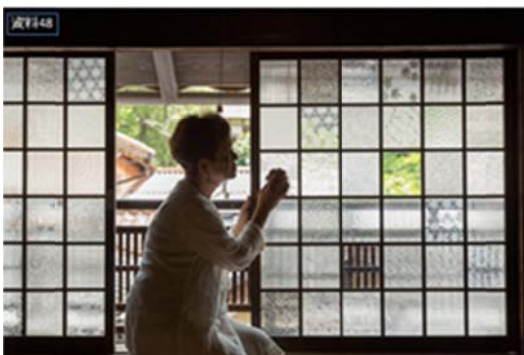




また、これも浴衣のボロを頂いて近所のおばあちゃんが縫ってくださっているんです（資料 47）。出雲民芸館にこういう言葉があります。「木綿は人に優しく身を纏い、最後は浄巾となってその一生を終える」と。雑巾ではなくてお浄土の”浄”で“浄巾”と呼んでいる。



これが私の自慢の建具なんです（資料 48）、割れたガラスをパッチワークのようにして造ったものです。



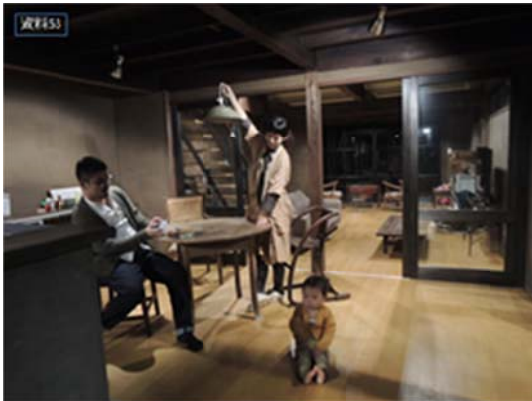
さて、次世代について、自宅の隣に5年前までおばあちゃんが一人で住んでおられまし

た古い家を娘たちが買いました。これがそうですが（資料 49）、どうなったか。



これまで8軒の再生を行いました。夫は建築のことを勉強したことのない人間で、1級、2級建築士など持っていません。「俺は脱臼（脱級？）建築士だ。」と言っていますが、図面は全部自分で引きました。ただ、この娘たちの家の時ばかりは、若い時に失敗しないと分からないということで、全く口出ししませんでした。娘たちが地元の大工さんに自分たちの要望を提示して造ったのがこの家になりました（資料 50～53）。





伝建の街並みの中で若者が住みたいものにしてくれたということは、私は嬉しいことでした。室内の壁の色は、白では子供が汚れて目立つので茶色の漆喰にし、ドアや建具はほとんど廃材を利用しました。夫が言うには、「建物とそこでの暮らしは、人間が創る最高芸術である」と。建物だけでなくライフスタイルそのものが一番大事なかなと思います。

これは“阿部家”が完成した日に夫がプレゼントしてくれた掛け軸ですが（資料 54）、私の座右の銘としています。“心想事成”です。

とかく人は、何かを成すときに、お金がないとか才能がないとか時間がないとか言いますが、私は想う気持ちこそが事を動かす一番のエネルギーになると思っています。稲盛和夫さんの著書の中に「想うことが一番大事だ。もし何かで手を切ったとしたら血が流れる場合に、想いが流れるくらいに人よりも何倍も強く想いなさい」とあります。実はこの“阿

部家”、最後の蔵が一つ残っておりまして、借金をまだ返済中ですが、この冬から改装に入ろうと思っています。



ところで、たびたび夫の話が出てきましたが、ここで紹介いたします。夫はちょっと面白い人でして、趣味は“お乞食さん”です（資料 55）。こういう格好をしたりします。若くして社長という立場になったけれども、“お乞食さん”に身を置いて世間を見るといろんなものが見えてくると。この写真は 30 代前半でしたので痩せておりますが、今はメタボであり、“お乞食さん”はできないと思います。



本社で働いております農学部の大学院を出たある女性がいますが、彼女が銀山の梅の花

からとても優秀な酵母菌を発見しました。うちの会社では手に負えないということで、県と協力して特許を取り、梅の花酵母菌の開発をこれから行う予定ですが、夫が言うには、「産業革命があって、IT革命があったかもしれないが、これからは菌革命だ。目に見えないものが力を持つ時代になってくる。自分は人類より菌類になりたい」と。この写真は萩市であったのですが、お武家さんや町医者の格好など江戸時代の格好をするイベント時のものです。この写真が萩の地方紙にデカデカと載りまして、記事には”この乞食は本物か偽物か？”と出てました。実はその時は本物でお金を恵んでもらいました。「乞食は3日やったら辞められないというのが本当だ。社長の安月給より時給が良かった」と言っていました。

よく世間様からは「飄々と生きてますね」と言われ、「俺は一所懸命が似合わない男だ」と嘯っていますが、「商売は山を作ってはいけない。低空飛行でいつも厳しい状況でやっていくのが最高の経営学だ」というふうに言っておりまして、なんか不思議な人ですね。

これが、小さなまちだからこそできる素敵なことということで25年前から町民の方に声を掛けて“集合写真”を撮っています（資料56）。



これは運動会の日ですが、お祭りの日ですとか何かイベントがあった時は皆さん集まり

やすいので、そういう日に撮っています。始めたころは人口500人でしたが、25年前は子供だった人が今では子供連れで写るようになりました。大森出身の方には無料で写真をお送りしております。こういうことが故郷を想う気持ちにつながるのではないかとということで、50年間撮り続けてアルバムを送りたいと思いますが、そうすると90歳まで生きないといけない。ハードルがありますが、90歳にならないと本当の人間の言葉とか生き方とかできないのではないかと考えています。今日も高松でスープ料理の先生の辰巳芳子さんと出会ったのです。90歳だそうですが品格のある方です。この間は福祉活動家で教育者の佐藤初女さんにお会いしましたが、92歳だそうですね。そうなるともう言葉一つが輝き、存在そのものにオーラがある。ですから私も今64歳ですがなんとか90歳まで生きたいと思っています。

これが本社の裏にある白樫の木ですが（資料57）、私たちはここに祠を造りまして“根っこの神様”としてお祀りしています。



根は地下にあって人の目には当たらないけれども地上のものに養分を与え支えている。見えないところ見えないものに価値がある。これからはそういう時代になると考えますが、なぜ“根っこの神様”としたかということ、手前の方は地滑りがあったのでしょうか土がな

いんです。ということはこの木は半分の根っこで立っているんですね。なのにちゃんと茂っている。私たちは半人前かもしれないし、会社も立派ではないかもしれないけど、この木のようにしっかり根を張っていけば、生き残っていけるのではないかと思います。そういう意味でも申し上げたように、目に見えないもの目に見えにくいところに力を入れていきたいなと思っています。そしてこの木に一本の蔓が巻き付いておりまして、蛇のように見えるんですが、夫は蛇年でいつも蛇行して、くねくねと這っているような人ですが、遠回りしながら目的の方へ進んでいるような蔓のような生き方をしている人です。

そしてこれが最後ですが、“ものさし”（美のものさし、豊かさのものさし、幸せのものさし）と書きました。“ものさし”の基準が変わる価値の変革の時代に来ているのではないかと思います。私はどん底のまちに嫁ぎましたが、そこに行って自分らしい“ものさし”がやっと出来上がってきたかなと思っています。住む価値を高めるといえるのか、それはそこに住む人達の問題であって、住みたいまちがそこにあるのではなくて、住みたいまちに自分たちが変えていくということができるのではないかなと思っています。

会社の経営について、最近、夫がある著書から見つけたのですが、“美学経営”という言葉がありまして、「商品とかサービスは美的価値に加えて、それを生み出すプロセスが美しいかどうかということが大事だ。そしてまた、マネジメントのあり方とか根源的には付加価値、独自性を創り出すということではないか」と。自分たちが持つ“美のものさし”というものを狂いのないものにしないと美学経営にも至らないのではないかと思います。以上でございます。

③質疑応答・意見交換

(松木)

松場所長ありがとうございます。非常に興味深いお話をお伺いできました。“阿部家”には今度行ってみたいと思います。

まず、基本的なことですが、本社で働いておられる方の人数、県外出身者、地元出身者の数、またどんな経緯で働きにこられたのかということをお聞きしたいのですが、どうでしょうか。

(松場所長)

県外の販売者も含めて全体で150名ほどの会社ですが、本社は40名が働いています。当初は専業主婦の方がパートさんで来ていて、また地元の子が働いていました。そして10年くらい経つと県外から就職してきましたが、まちは住まずに大田市内から通って来ていました。今県外から来る子たちはまちに住みたいという人が増えてきました。そして、まちの町内会にも入って、また、近所のお葬式も手伝ったりするようになりました。比率としてはまだ地元の人が多いのですが、県外出身者は半分近くまでなってきました。平均年齢は35歳です。

(松木)

どういう形で人を集めておられるのでしょうか。きっかけはどうでしょうか。

(松場所長)

夫は変わった人で、優秀な子が来ると、「あなたみたいな人はどこの会社でもやっていける」ということで断るような人で、例えば、お得意先の息子ですが、道を外れている子を連れてきたりとか、仕事のない子を連れてきたりとか。ですから正式に履歴書を出してもらって採用するようになったのはここ数年で

すね。今会社の企画部門のトップになっている者は、中学にろくに通っておらず、高校も出ていません。親戚筋のおじさんからお預かりしましたが、成長して他の社員からも信頼を得て、今は立派に働いています。東京外語大学出で TOEIC が 960 点という人も来ましたが、よく聞くとどこの会社に行ってもダメだったという子が集まってきますね。

(松木)

それは、ご主人の人を見る目ということでしょうか。

(松場所長)

夫は今も言うんですが、「人は能力じゃない。その人間が持っている伸びようとする力を見ることが大事だ」と。そんなことを言っています。

(三木)

仕事が終わらずに逃げ帰ったりする人はいないのでしょうか。

(松場所長)

そういう人はいません。というのは、夫はそういう人に大変優しいんですね。例えば、県外から来ている人には毎週水曜日には、夫が手料理をして家族みたいに一緒に食べます。町内に住んでいる 10 人くらいですが、また、月に 1 回は“カレーの日”ということで全社員と一緒に食事をします。作っているところを見たら誰も食べないと思うのですが、冷蔵庫の残りのものをみんなぶち込んで作ります。そういうことをとても大事にします。

また、実は明日(12月3日)が私の誕生日ですが、当日居ないということで前もって社員が手作りで”阿部家“の奥座敷で大宴会を開催してくれました。そういう会社です。

(大槻)

実は、石見銀山生活文化研究所の山崎さんという方には高知大学の1年生を対象にした授業で来ていただいたことがあります。“群言堂”のお話をしていただいたのですが、地域に入ってそこで住まい暮らしながら働いているということを聞きました。そこで思ったのが、ご夫婦が信念を持ってやっておられるのがすごく印象的で、志があるから形ができていったのだなと思いました。それに加えて、うまくそこで若い人を受け入れていらっしゃる。お二人はフロンティアというだけでなく、地元や外からの若い人を受け入れて一緒にやっておられる。その中から出てくる新しいコンセプトを引き継ぎながら、田舎で持続的な暮らしを創る人がまた生まれてくると思います。お二人が残された道ができているのを周りの人が見ているから、次の人たちは、同じような考え方で広がっていけるんじゃないかなと思います。そういうような仕組みを石見で創られていることを尊敬します。

(事務局)

本社は平均年齢が 35 歳ということですが、全社的にみたらどうでしょうか。

(松場所長)

全社的にみると、実は販売員さんにはかなり高齢の方もいて、最高齢は 70 歳まで働いた方もいます。本人の意志があればということで働いていただいています。また、本社には楫谷という人がいますが、今 75 歳です。左官も大工もでき、それから農業もできる。元氣なうちは社員でいて欲しいと思います。

(松木)

大森町の人口は 450 人ですが、買い物、病院、学校はどうでしょうか。また、大田市と

の距離などは。

(松場所長)

小学校は全校児童が 20 名です。これまで 10 名不足だったのが過去最高ではないかと思えます。中学になると隣の町に行きます。高校は大田市内に通いますね。

買い物については、地元で食料品や日用雑貨を売る店が 3 軒あります。私が嫁いだ頃から変わっていません。笑い話ですが、いまだに“通い帳”で買い物していますので、娘たちは現金で物を買うことを知りませんでした。中学になって大田市内に行ってスーパーで買い物をして現金で支払うことを教えました。

大田市は 3 万ちょっと（事務局注：約 3.8 万人）の市で、中心街までは車で 15～20 分です。かつては大森の子が大田にアルバイトに行くだけでしたので、15 年くらい前ですが、次女は、大田から大森に来るなんて歴史上なかったのではと非常に驚いていましたね。

面白いのは、本店の 2 階に 40 畳くらいの広い部屋があるので、私たちはずっと、そこを使ってミニコンサートなどいろんなイベントをしてきたんですが、あるフランス人がクラシックの演奏会をやった時に“阿部家”にお泊りになって、「自分の人生の半分はこういうまちに住みたい」と仰いました。夫が一軒のボロボロの平屋の小さな家を見せると、それを気に入られました。夫がその家の部分部分を直して、その状況をメールで送るようなことをしていましたが、今はとても喜ばれて、年に何回かは長期滞在されているのです。リタイア後はこのまちに住みたいと言っています。そういう人も現れています。

(三木)

町の人口が 400 人強で世帯数は 200 くらいですが、単身の高齢者が多いのでは。そうい

う方もそこで働いておられるのでしょうか。また、元気に過ごされているのでしょうか。

(松場所長)

高齢者のほとんどは年金生活ですね。以前は、値札付けとかのおばあちゃんができる仕事があったし、私の手仕事を手伝ってもらったりもあったのですが、今はないですね。生活は自分の畑を耕したり、朝早くから散歩されたりして賑やかで、銀山は本当に“銀座通り”だと言っています。

私は、今年から“暮らしの学校”というのを立ち上げました。これは私たちの親の世代がやってきたことを私たちの子供世代に伝えていないのではないかということで、近所のおばちゃんが先生になったりもして、美味しい押し寿司を作ったり、美味しいたくあんを漬けたりとか、元気な方たちがそういうことをして交流しています。“集合写真”の話もしましたが、集まってくださいます。最近はお葬式も隣のホールでやる人も出てきましたが、私たちは極力昔の形を残していきたいということで、若い社員や娘は興味深々でお手伝いに行きます。そうすると、地元のおばちゃんたちが、煮物の作り方とかお寺さんの作法とか、漆のお椀の扱い方とかを教えてください。それこそ“暮らしの学校”ではないかと思っています。私の娘は 3 人とも”阿部家”で披露宴をしました。

(石塚)

“暮らし方をデザインする”というお話がありました。大森町の 10～20 年後の機能とか、どういうふうになっている、あるいはどういうふうになりたいと考えられていますか。

(松場所長)

去年7月に帰ってきた三女が、さっきお見せしたような家に住んでいまして、今後、まちに住みたいという若い人が増えてくると思っています。その一方で空き家も増えてくると思いますので、空き家を改修して住みたいと思う人たちに利用してもらいたいと思っています。かつては、自分の出身地だからということで住む人が多かったのですが、これからは、住みたいと考える積極的な人が増えると思います。先ほど言ったフランス人の方ですが、その息子さんがワインのブローカーをされていますが、「どこに居ても仕事はできるから、こういうまちに住みたい」と言っておられます。

歴史や背景はつながっていくものだと思うのは、天領だった時代に江戸から人が来るなどいろんなつながりがあった田舎なので、単なる田舎ではないという思いがあります。

私の数軒下（しも）に面白いお家があります。お父さんが輸入の仕事をしている関係で、早稲田を出た息子さんもそういう仕事が好きで、イタリアのカリヤーリ・コーヒーの取扱代理店をしたいと申し込んだのですが、彼が東京でそのビジネスをやりたいと言っていた間はずっと断られていたのが、大森のまちに来て、おばあちゃんの古い民家でやりたいと言った途端にOKが出たということです。また、彼は、イタリアのパニーニのパルメザンレジアノーというチーズを仕入れたいのだけど、自分の店の歴史では許可が出ないので“阿部家”で代行してくれないかと頼まれたことがあります。ただ私としては国内のものを大事にしたいという考え方でしたので一応お断りはしましたが、彼のように古い街並みの中にカフェを作りながらも、営業で全国を飛び歩いているという子もいます。恐らく、まちにそういう若者が入って来る可能性があ

るなと思っています。

(石塚)

10～20年後を考えた時には人が増えてくるとしても、そのコミュニティを維持するためにキャパシティはあるのではないのでしょうか。こういう人でないと行きたくても行けないという環境ができてくるのではないかと思ったりします。その辺のルールというか、こういう人でないとまちでは受け入れないというか、そのような哲学はあるのでしょうか。

(松場所長)

私がおこなうような規制ができるわけではありませんが、世界遺産になった直後に、いろいろなお店を出したいということで実際人が来たんですが、結局採算が合わずにほとんどが撤退しています。当時、夫は自治会協議会というまちのいろんなことを決めるトップにいましたので、「あなたは町民運動会に参加できますか、近所のお葬式の手伝いに出られますか」とかいろいろなことを言っておりましたね。

(石塚)

やはり地域の中に溶け込めるような人でないと無理なのではないでしょうか。また、住みながら馴染んでいくということはあるでしょうが、文化の継承は難しいのではないかと感じます。

(松場所長)

それは難しいと思います。価値観が多様化している人が住んでいるのが集落なので、一つの宗教みたいになるのはおかしいと思います。ただし、ビジネスを通して価値観を問うていくことはできるんですね。

ここに私どもの包装紙を持ってきましたが、これは海の植物プランクトンをデザインしたものです。多様な小さなものが生きられる社

会を私たちは目指していますということがデザインされています。この包装紙の裏は、実は1年に1回発行している新聞なんです。



こういうこととか、毎月1回、自分の価値観とかを書いたポストカードを5,000枚無料で配っていますが、ビジネスをしているからこそ、ささやかですが、お客さんに我々の価値観を伝えることができるかなと思っています。

また、お客様に先日700個の“さつまいも”のお歳暮を贈りました。なぜ“さつまいも”かと申しますと、石見銀山には“芋代官”の話がありまして、江戸時代の飢饉の時に赴任してきた井戸平左衛門という人は大変な人格者で、薩摩の国から種を持ち込んで民を救ったんですね。神社にも祀られているんです。そういう話を“さつまいも”に結び付けて、また私のメッセージとして、「頼らない、寄りかからない“いも”の生き方」という文章を入れています。調べると“いも”と“いなか”は同意語で、“芋侍”とか“芋助”とか野暮ったい無能なものの意味に使われ、人を嘲る言葉ですが、れっきとした私たち田舎者が、これから正に力を発揮する時代になるんじゃないかと思っています。そういうことでこの“さつまいも”にはこのような田舎者魂が込められていますと書いています。痩せた土地でほったらかしても育つし、支柱に巻き付いて伸びるエンドウやキュウリと違って土を這う“いも”の蔓のように、何にも頼らない寄りかからな

い生き方はすごいみたいなことを書いて贈りました。

そういうふうに、お歳暮一つにしても、包装紙一つにしても、自分たちのメッセージを込めて贈り続ける。これで社会が大きく変わるわけではないかもしれないけど、私は今手応えを感じています。

それから袋ですが、隣町の施設の方々が包装紙を一枚ずつ手で破ってノリで貼って、このスタンプも1個ずつ押してくださってます。2つと一緒にのものはないわけです。同じものが大量生産されますが、基本はこういうことが大事だというメッセージを込めているわけです。私どもは国内の素材を使って国内で縫製しますので、決して価格は安くはありませんが、そういう考え方にお客様が付いていただける時代になったと思います。

(松木)

天領で単なる田舎ではないとありましたが、他の場所で石見のような可能性はどうでしょうか。石見は特別なんですか。また、石見の特徴は何でしょうか。

(松場所長)

よくその質問を受けますが、西村先生の著書にも触れておられたのですが、私が石見銀山ではなく他の土地に嫁いでいたとしても、たぶん何かをしていただろうと思います。全国的にもいろいろなことをされている方がたくさんおられます。

石見の特徴は、文化力だと思います。中央とつながっていた天領の時代から受けていたものが、過疎のどん底になって、高齢化の時代になっても、どこかにその名残が綿々とあったのではないかと思います。

(安藤)

石見周辺と異なるものはあるのでしょうか。新しい情報は入ってきていて、それに対する恩恵なり影響なり、考え方が少し変わっているとか、そういうことがずっと生まれてきていた土地ということでしょうか。

(松場所長)

そうだと思います。“阿部家”に泊る人はいろんな人が来ますが、みんなそろって台所で食事をします。3時間くらいかけて食事をします。そうするといろんな話題が入ってきます。あの家は銀山付の役人の家だったので、その家の歴史として今につながっているのだらうと思います。「阿部光格」という江戸中期に生きた人はすごく絵が上手で、京都に修行にも行ったらしいのですが、その人が書いた日記が“阿部家”の蔵から出てきて、読み解いてもらったところ、3日と空けずにお茶会を開いたり、いろんなことをしていたということが分かりました。恐らく普通の田舎とは違っていたと思われれます。そういう歴史的背景というのは目に見えないけれどもどこかでつながっているんですね。

(安藤)

閉鎖的な社会だと昔の繁栄を取り戻すという誰か文句を言わないんですが、新たなアクセスがあると、なかには外から来るのを嫌がる人たちもいますよね。そういうような閉鎖的な文化は石見にはないということですね。天領の時代からいろんな人が来ていたという意味で。何か新しいことをやる時について外から人が来る。それこそ外国からも来る。アレルギーを起こす人があまりいない、受け入れる土壌ということですね。

(松場所長)

そうですね。そういう許容力はある気がしますね。

(三木)

小学生が20人ということですが、将来的な作戦はあるのでしょうか。若い夫婦が来ないと難しいでしょうから。

(松場所長)

その質問に全て答えることはできません。身内の狭い範囲の話ですが、私の三女は私を手伝っているのですが、2人を出産しました。幼稚園の運営を大田市は手放してしまってますので、今は民間で運営しています。私どもでは毎年、次女が“We are here” Tシャツを作って、売上の35%を幼稚園に寄付するという活動をしています。そのほか端切れの売上を全部幼稚園に寄付するとかいろんな活動をしています。もう1社、中村ブレイスさん(※)という会社があります。その方たちと協力して運営していますが、娘たちは、自分たちで古い民家を改装して運営して、しかも近所のおばちゃんたちの手も借りて、こういう子育てもできるという計画をしているようです。

※事務局注：中村ブレイス(株)

1974年義肢装具製作所として大森町で創業後、1982年に法人化。新素材や新技術を取り入れる研究を重ね、新感覚の義肢装具、医療器具をオリジナル開発・販売。現在大森町の本社のほか東京、広島、米子、マレーシアに事務所があり、従業員は全体で70名程度。

また、鉄の彫刻家の吉田さんは20年前に移って来られたのですが、4人の子供があって借りる家がなかったので、とにかくどこかに入れなきゃと、郵便局長さんを追い出して住

んでもらいました。本当に子供は宝ですから。

また、小学校は残したいと思います。どの地域も少子化とか過疎化とか迎えるわけですから、人数が少なくても良い教育ができるとか、この前、娘は、紙芝居のメンバーを呼んで茅葺の家を使って大きなイベントをしましたが、そこでも大森のような環境の中で子育てをしませんかというチラシを配ってたんですね。近郊のお子さんと呼び込む活動をしたりいろいろ努力はしています。大田市の支援も特にありませんが、将来的には解決できる方法が出てくるだろうと、決して悲観的には思っていません。かと言って、今、策があるわけではないですが、楽しく私たちが暮らしているところだから、きっと人も喜んで来てくれるだろうと思っています。

(平尾)

田舎は好きで住みたいところはたくさんあるのですが、まず食い扶持を作らないと思います。土地が持つ歴史というのは大きいのでしょうか、職が何も無いところでは大変だと思います。また、人を受け入れる受け入れないという話がありましたが、秋田県の例ですが、医者がいない。呼んでもすぐに辞める。ベテランまでもが辞めてしまう。医者が我儘かなと思っていたがどうもそうではない。要するに、人が来るところとそうでないところがあるのではないかと思います。その要素は何なのか、文化的背景といったこともあるのかなと思いましたが、研究テーマのひとつとなりそうです。

ところで、今おやりになられていることを経験した人が他の場所で増殖するような傾向はありますか。

(松場所長)

そうあって欲しいと思います。先ほど話し

ました家具屋の放蕩息子は岡山の山奥から来ている子ですが、多分、地元に戻ってやると思いますね。西村先生は、過疎の町に“群言堂”がドンドン進出して欲しいみたいなことを仰いますが、その土地の人がその土地を守って欲しいと思います。

最後に紹介したことは、本当の豊かさとは何だろうということです。私自身は車の運転はできませんので、大森のまちにほとんどいますが、不便を感じたことはありませんし、都会に行って羨ましいと思ったこともないし、豊かさの価値観、尺度が大きく変わっていく時代になっているのだと思います。ただそこに住む人たちの意識の問題ですから、地元の人たち、特に女性の意識が変われば地域が変わると思っていましたので、“田舎に暮らす女性の意識を高め、より豊かな暮らしを考える”という“鄙のひなまつり”を10年間開催しました。その10年間やっているときは子育てや親の介護とかいろいろあって何のためにこんなことをやっているのだろうと思いましたが、終わってみて、次に世界遺産という大きな波が来た時に、町民集会などの時に、“鄙のひなまつり”に参加していた女性の意見は素晴らしかったんですね。ですからそういう働き掛けは常々やっておくべきだなと思いました。

(平尾)

自分を考えてみましたら、案外、動いている範囲は広くなくて、飛行機に乗って遠くへ行っているけれど、行った先での行動範囲はあまり広がらないとかありますね。こだわりがあるのかもしれませんが、住み始めた人が、行かないけど行けるよというのがあるのかなと思ったりもしました。

(松木)

大田市という4万人近い人口のまちが15～

20分のところにあるということですが、買い物等はそこに行くわけですよ。そこその機能があるのでは。

(松場所長)

そこには大きなスーパーはありますが、中心街の機能強化や活性化にはご苦労されているようです。私があそこに本店を造りかけた頃に大田の人たちからは「松場さん、頑張りなさいよ」と言われましたが、私の心の中では“あなたたちこそ、頑張ってくださいね”とつぶやきました。

(安藤)

そうですね。大田はそんなに栄えていないですね。兄が大田の山奥の方の試験所※に一時いたことがあるので分かります。

※事務局注：(独)農業・食品産業技術総合研究機構 近畿中国四国農業研究センター
大田研究拠点：島根県大田市川合町

(近森)

お話の中に出てきた写真を見て心が温まりました。松場さんとほぼ同じ世代の人間ですので。良い言葉がいっぱい出てきた。見えないところの価値を本当に何とかしないと日本はダメになるのではないかという気がするんです。大学でも10月に認証評価がありましたが、今は見えないものはないものとして評価してくれません。官公庁なども全て今“見える化”という変な言葉が流行りですが、“見える化”しようとする、松場さんが仰ったいろんな良いものが全部落ちてくる。見えないものを見えるようにするということ自体に、見えないものの価値をドンドン貶めて行くものがある。そういう感覚が変わっていく、変わり目のところにあるというのが一番のポイントになると思います。

それで松場さんには頑張っていたほしいと思います。教育でも正にそういうところがあり、言葉で語ってしまうと一番大事なことがボロボロと落ちて行く。言葉にも文字にもできない何かが大それたと思っています。そんなものが結構、教育の質を支えているように思っていて、学校は正に地域のアイデンティティであり、そういうものによって人の心がつながっていくので、学校が無くなっていくというのは、そこで培われた歴史や文化、またそれによって支えられている人のつながりが全部ボロボロと崩れ落ちて行く。そういうような状況の中で今日、写真も含めてお話を聞いて、本当に信念を持って、しかし肩肘張らないで楽しみながらやっておられることに非常に勇気付けられました。是非、松場さんの活動がドンドン人に訴えかけて世の中変わっていったらいいなと思うと同時に、私ももう少し生きていてもよいなあと思いました。

もう一つ、がっかりしたことは、中山間地域の学校に何か支援をしたいなと思って話を持っていったのですが、取り合ってくれなかったことがあるんですね。お話に出ていたように、何か外から受け入れる時の受け入れる形、仕組みというか受け皿があるような気がしますが、そういう受け皿は何がつくっているのか。分かれば教えていただきたいのですが。

(石塚)

どこに相談するか、誰がサポートするかという感じですね。

(松場所長)

“阿部家”の隣に“宗岡家”という廃屋に近い状態のものがあって2,000万円かけて改修して大田市に寄贈したんですね。“宗岡家”という名前を残したかったからです。ところが何年も放置されていて、やっと改修工事が

入って3年後に完成するのですが、どういふふうにもそこを活用するかという相談が今来ています。私個人ではできないことでも、民間でもなく行政でもなく中間的な役割でそこを活用できたらいいなあと思っています。観光施設を造るというのではなく、地元の人たちが誇りを持って暮らせて、子供たちも未来に夢を描けるような場所になっていけばいいなあと思って、大田市にはそういう意見を少しずつ上げてはいるんですが。

(近森)

自分の経験からすれば、Uターン者はメディエーター（仲介者、調停者（仲裁者）、媒介者という意）になれるかなと思うんですよね。

(松場所長)

夫はUターンなのですが、あの時代の男社会は非常に厳しいらしくて、いつまで経っても上下関係を引きずっています。私が自由奔放に生きるものですから、「あなたはいつも気楽でいいなあ」と言われるんですが。夫の同級生は誰も帰ってきていない。帰って来れば地元の人は大歓迎だと思いますが。あのまちに生まれ育った人が、まだまちの価値に気付いていない時代なのかな、むしろ、その人たちの息子とか孫の時代になって初めて気が付くのかなと思います。

石見に家を持っている人ですが、滋賀県に出てそこで家を建てておられたので、石見の家を買って欲しかったという話がありました。でも夫は、買う力はないが、直すから帰る場所として残したらどうかと提案したのですが、その方は拒否し続けました。結局はその方が自分で直されたんですが、今は滋賀の家を手放してご夫婦で帰って来られて、また娘さんたちも帰って来られています。夫にも感謝されており、今は町内会の役員もされたりボラ

ンティアガイドもされたりして良い人生を送られています。そういう人は増えてくると思います。

(大槻)

実は自分は京都に限界集落に近い田舎があり家が残っていて、父は定年になるかならないかの年齢で、帰るかどうかという時ですが、父の考えを慣らそうと思って知り合いの知り合いの学生を送り込んでみたりしてるんです。古民家を再生する場合、自分では住みたくはないし住まないけれども、他の人に権利が渡る時の心理的な抵抗とかあると思います。それをどういふふうに乗れ越えられてきたのかお伺いしたいのですが。

(松場所長)

田舎は土地も安いですし、仏壇やお墓もあるし、あえて売る必要はないと。だけど古い家は壊すのも直すのもお金がかかる。諦めがつく時というのがあるのですね。そうなられる境地を待つということも必要だと思います。

お金のことは考えない、その代わりに年月をかけてきました。本店は今のようになるまでに18年かかりました。“阿部家”は10年かかりました。そんなに儲かっている会社じゃありませんが、これまで町内だけで数億円もの投資になっている。もし私たちの会社なり個人の手元に数億円のお金があったとしても、これだけの元気とか夢とかあるかということではない。あの建物であったりとか若者が住んだりとか来てくれたりするから未来に夢を描けるので、時間を掛けながらやるのが大事なことかなと思います。まだまだ空き家はいっぱいあります。

(渡辺)

感動的なお話、ありがとうございました。

結局、人が強い意志を持って生きて行くことが根本だということを改めて思いました。覚悟を持って、粘り強くやれるのかどうかに関わってくる。この良いお話をかいつまんだ方法でやっても絶対うまくいかない。何故なら覚悟がないからと強く思いました。人ごととして見ていてもしかたがないですから。

私事ですが、タイとか被災地とかの貧困者の建築に関わっていて、方法だけ持って行ってもしょうがないと気付いていまして、信頼を得るまで復旧するまで現場にいる必要があると感じました。今、高知のなんでもないマンションに住んでいますが、昔のような風景の里を造りたいと言われる方がおられたので、お手伝いしようと思ったのですが、手伝ってもそこに住まないという意味がないので、そのつもりで、土でつくるところからやっています。個人で投資する話としては、それだけの覚悟をしたいなと改めて思った次第です。

(中川)

印象深い写真がたくさんありました。大根干しの風景など美しいと思いました。今日のお話では行政があまり出てこないのですが、行政との関係、全く新しいことをやっていくに当たっての行政の果たし得る役割についてはどうでしょうか。

(松場所長)

大森のまちが重伝建の指定を受ける時、夫の親の世代が中心になっている時代だったんですね。衰退したまちで藁をも掴む想いで重伝建を受けようということで指定されたわけです。それから数年間は市役所の優秀な担当者とかと随分交流があって良い関係が続いていきました。私自身も「石見地域デザイン計画研究会」を発足させて、本店を拠点に地域のキーパーソンが集まってきて、「集合写真」

もその当時からの出発なのですが、ところがいつの間にか行政が離れていったのです。いつも言いますが、「出世する前のヤル気満々の20~30代は面白いけど、課長などの役付きになるとつまらないね」という話が出てきます。

先程も申しあげたように、世界遺産になる時も行政は諸手を挙げて賛成と言わざるを得ないという、問題や危機は全て消していくというふうに出たんですね。その時私たちと行政とのかつての和気あいあいとあの地域を舞台にして遊んだ仲間は離れていったというのが現状です。ただ、私は喧嘩をしているわけではなく、隣の“宗岡家”についても大田市の担当者の方と今も話し合いをしたりとかの努力はしています。この前もいきなりアンケートで町民が希望することなど聞いてきましたが、こういうアンケートが反映されたいめしがない。町民は全く信用していません。それよりも“宗岡家”について、みんなが情報を持って、どうしたらこの家がまちの誇りになるか、現場の調査などにみんなを巻き込んで一緒にやりましょうという話をしました。今の方たちはとても素直な方が多くて、そういう形に変えてくださってありがたいと思っています。私たちも、意見を言わない町民も悪いし、耳を貸さない行政も悪かったと思うので、良い関係は築いていきたいと思います。ただ、世界遺産が大きな亀裂を入れたのは事実です。それはまちの人という意味ではなく“松場家”という意味です。

(中川)

まちの大きな方向性を考えていく時に、行政はあまり役割を果たさないということがあるということでしょうか。

(松場所長)

そういうこともあり得ますね。私はあると

ころで、「行政は知恵もない、愛もない、センスもない」と言ったことがあります。自分たちがリスクを負おうとは全くしません。ですから自分がリスクを負う覚悟をしない限り前にもものは進まないのです。

(中川)

プロフィールを拝見していて、ターニングポイントはご結婚の時かなと思ったのですが、覚悟を決めた背景には、1949年生まれから1981年まで抜けていますが、幼少期にまでさかのぼるのでしょうか。どのようなお嬢さんでいらしたのでしょうか。

(松場所長)

両親は他界しましたが、姉たちから言われることですが、「全く信じられない」と。私は非常に無口で本当におとなしい子だったんですね。人前でものを言うことが全くできなくて。何故かというと子供ながらに価値観が違ったのです。一般的にはみんな赤い方が良いというのに、私はこっちの方が絶対素敵だと思っている。それでこっちが良いというと苛められるので答えは言わないようにしてずっと無口で育ってきました。4人姉妹の末っ子でしたので、姉3人は厳しかったですね。押さえつけられたりもしました。

でも高校に入って美術部に入りまして、当時の先生はお坊さんでありながら芸術家でもあり教員でもあり、非常に面白い人で、その人が初めて私のことを「お前の目線は面白い、その考え方は面白い」と褒めてくれたんです。それまでは変わり者とか暗い子だとかマイナスで常に言われていたのが、その先生に出会ったことで勇気100倍になりました。その先生とは今もお付き合いがあります。80歳になられて個展を開くということで案内もいただきましたが、「スイスの山で見た風景は、自分

は寺の坊主だけでも、神様はいると信じた」ということを書いてくださるような人でした。それ以降、人生にはちゃんと出会うべき時に会う人が準備されているんだと思うぐらいに不思議と人との出会いには恵まれました。

小学生の頃、姉たちはダッコちゃん人形に夢中になりましたが、私は良いとも思わなかったし、田舎町でしたから、中学生の頃になるとみんな津市の方に遊びに行くんですが、私は何が楽しいんだろうと思ってました。田舎では“香落溪”(こうちだに、三重県名張市青蓮寺)の溪谷に行ったりとか梅林を見に行ったりとか、そういうことが好きだったんですね。ですからそういうふうな価値観の違いが大きかったと思います。しかし、今幸せなのは、“阿部家”にお泊りに来てくださる方とか“群言堂”の服を買ってくださるお客様というのは、非常に価値観が共有できる方が多いので、世の中にはこういうことに響いてくださる方もあるんだと思うようになりました。少数派というのは、やはり貴重ななと思います。

(中川)

そういう価値観が生まれたきっかけは。

(松場所長)

持って生まれた個性と母の存在が大きかったと思います。父が事故に遭って働けなくなった時、私は母のお腹の中で5ヶ月を過ぎていたのですが、母は一家を背負っていかなくてはということで、5升の油と1升の大豆を買ってきてお豆腐やお揚げを作って、近所に売り歩くようになったんです。私が生まれた時には、姉たちが言うには、いつもお籠(くど)さんの前で子守されていたと。だから、台所は私にとって原風景だったのではないかと。小さい時からずっと母の働く

姿を見ていたから、そういう働く喜び、働くことを辛いと思わない心は、母が授けてくれたと思っています。無学な人でしたが、とても宗教心の強い人で、“ありがたい”とか“もったいない”とか感謝する言葉を常に言っていましたし、「もし辛いことがあっても乗り越えられる力があるんだから努力しなさい。もし良いことがあったら、それはお前の力じゃないから、感謝しなさい」と言っていました。そしてまた、「堂堂としなさい」でした。そのような母の存在は非常に大きかったと思います。昔の女性は非常に強かったと先ほど申しましたが、母を意識したことでもあります。

(中川)

女性の意識が変われば世の中が変わるということですね。自分の価値観と違う人たちにどのような苦勞なり努力なりをなされたのでしょうか。

(松場所長)

ほとんどの消費は女性が担っています。食事にしろ住みたいところにしろ女性の意見が圧倒的に強いと聞きます。だから、女性の消費意識が変わらないと世の中も変わらない。それで40歳の頃に“鄙のひなまつり”というイベントを10年間やりました。10年経って思ったのは、他人を変えるのはおこがましいことだということ。一番変わったのは自分自身だと気が付きました。その時出会った名言が“過去と他人は変えられないが、自分と未来は変えられる”という誰かの言葉だったのですが、自分が変わればと思ってやり続けたら周囲も変わり始めたというのが実感ですね。

(近森)

確かにそういうことがありますね。あるまちの話ですが、ゴミの分別収集で役場が自治

会の会長に話しても全然進まない。ほとんど会長さんは男性ですよ。それで奥さんとかお母さんたち、婦人会とかに行くと、すぐ変わったと言うんです。そういう意味では目の付け所が良かったなあと、今聞いて思いました。とにかく何かを変えたかったら女性を変えればいいということが結構あります。

(松場所長)

“鄙のひなまつり”では、最後は大宴会を開くんですね。その時は男性はみなエプロン掛けでお酌をしたり、最後の片づけまでキチッとやってくれます。応援してくれた男性は、楽しかったのでまたやろうよと言ってくれます。

(石塚)

“高知県は一つの大家族やき!”という「高知家」のキャンペーンを行っています。大森のまちも一つの家族という意識が強いんじゃないかなと思います。行政の役割とか対応などのお話もありましたが、大学が行ったら鬱陶しがられるかもしれませんが、大学に期待することとか大学はこれをやらないといけないとか言っていただけとありがたいのですが。

(松場所長)

大学の先生が来られると、よく何かできることがありますかと問われますが、「そんなことは自分たちで考えてくださいよ」と言っています。とても優秀で知識も豊富な方たちなので、役に立つことはいっぱいあると思います。

(石塚)

頑張っている地域に学ぶことは多いかもしれないが、学生の教育の一環で学生を連れて

行くのは、あまり快く思われないのかなというのでしょうか。

(松場所長)

そんなことはございません。ある時、二人の子が歩いていて、聞くと野宿するというので、泊めてあげたんですね。それが縁でもう13年続いているんです。立命館大学の“出前ちんどん”（事務局注：1998年に結成された多国籍音楽サークル）というのですが、合宿の最後の日には縁側でコンサートをしてくれて、5年くらい前からは声が掛かって隣町の老人介護施設にも行くようになって拡がり、良い流れが出来ているんですね。それから“阿部家”の方も、一般には高めの宿泊料ですが、学生さんには安い料金で体験という形で合宿していただいています。いくつかの大学のゼミの方たちに来ていただいて、お泊りもいただいています。そういうことも伝えたいと言うのが“阿部家”の事業の大きな目的なので、機会がありましたら番頭にお声をかけてください。

(釜床)

私は故郷は徳島の田舎ですが、石積みのある風景を思いながらお話を伺っていました。そしてその風景を残したいなと思いました。大学の立場では自分の故郷だけでなく、いろんなところに応用できる方法論を考えたりするのですが、そのまちに住んでいらっしゃる方が、まちの一員として住むことを楽しませている。それプラス、意図的に何かそのために啓蒙されながら、自治会の役割も担われながらいろんな活動をされているなという気がしました。

(松場所長)

そうですね。運動会の直会（なおらい：神

社に於ける神事の最後に、神事に参加したものの一同で神酒を戴き神饌を食する行事（共飲共食儀礼）だとかお花見会だとか、“阿部家”で蒸籠を蒸しあげて餅つきしたりなどが恒例になっています。そうすると、赤ちゃんからお年寄りまでみんな集まってきて、来られない方には子供たちが配る役をしてなど、宿にしたから宿にしか使わないというのではなく、泊ったり町内の人が使ったりとかいろんなことをしています。

もう一つ、“阿部家”だけでなく、JRの“ecute（エキュート）エキナカ”を作った鎌田由美子さんがお泊りになった時に、東京駅に“エキュート”を作るので出店しませんかと言われたのですが、変わり者の夫は、「東京駅は誰でも儲けることができるがうちはやらない」と言いました。その話の中で、高尾駅が2年後取り壊されると聞いて、夫はそちらを選びました。なぜかというと、高尾駅は木造駅舎で大正天皇の大喪列車の始発駅として新宿御苑に設置された仮設駅舎が移築されたものらしいのですが、「駅はどこも同じようになっている。あの駅は残したい」ということからでした。私が下見に行った時は閑散としていて、なぜこんなところを選んだのか、東京駅だったら儲かったのにと思いました。当時はマックが入っていたのですが、早く出てくださいって、“一言堂”と“群言堂”という今の飲食店と服飾店を作ったんです。4年目を迎えました。その2年後の取り壊しは予算がないということで流れているようですが。そして月に1回、その商品を全部片づけて、自分たちのブレーンに来てもらって話をしてもらうという“駅弁講座”を開催したんですね。みんなと一緒に弁当を食べて、駅で弁じてもらう。西村先生も来て「駅の魅力」という話をしてくださいました。夫が言うには、「駅は単なる通過点ではなく、一つのコミュ

ニティを生む場所になれるんだ」ということで、高尾の駅舎に店舗を造りました。そういうふうにして、西荻窪にも昭和の初期の民家を再生して、職人さんも石見から連れて行って造りあげた店舗ができましたし、夫は今またちょっと違うところに狙いをつけているみたいですが、そういうことを少しずつ進めていけたらと思っています。

(釜床)

大事なことは今見えるそのまちが持っているポテンシャルを活かすということですね。石見以外で建物を造る時にも石見の職人さんに行ってもらうとか石見の文化を伝えるということに徹するというのでしょうか。

(松場所長)

そうですね。全く東京の職人さんを使わないということではないのですが、西荻窪の古民家再生も屋根葺き職人、左官、大工みな石見から連れていきました。何カ月もマンション住まいしてもらって。そしてこのたび東京でも日本橋三越の真向いに建てているビルの中に店出するんですが、内装の漆喰の壁塗りも地元の左官さんが2週間かけて塗ってきました。

(兵頭)

貴重なお話ありがとうございました。故郷の風景は新鮮に感じていいなあと思いました。学生も宿泊しているとのことですが、実際宿泊した際に、宿泊前後の心境の変化とか学生の声はどうでしょうか。

(松場所長)

顔つきが変わりますね。学生さんだけでなく一般のお客様も変わります。“阿部家マジック”と言っていますが、私がそんなに語るわ

けでもないのですが、どういうわけか、自分の中に持っているものが出てくるんでしょうね不思議と。あの大根が干してある風景とか裏庭を竹箒で掃除する風景とかいろんなものに目を向けることで変化すると思います。お泊りになった方が朝に散歩すると、身も知らない近所の方や子供たちが挨拶してくれる。あのまちでは当たり前なんですけど、その当たり前が非常に珍しいみたいです。また、“あきちゃん”という子が料理を作ってくれるところを見ながらそこで食事をするのもそうでしょうし、恐らく、それまで体験していないことを体験するのでしょうか、それは何か突拍子もない新しいことではなくて、どこかで見た聞いたシーンを目の当たりにできるということが大きいと思います。30代半ばの男性が泊られた翌朝、「自分は変わりました」と仰いました。何かと聞くと、「些細なことですが、夜トイレに行くとき、渡り廊下で蛾が飛んできて、鬱陶しく感じたが、トイレを出た時、その蛾がガラス窓に止まっているのを見て、無意識に僕の方が邪魔をしたんだねとその蛾に声を掛けた。それまでの自分では絶対にあり得なかったのに」というのです。例をあげれば数えきれないほど、何か変わったという方がおられます。

ある大学の先生がゼミで宿泊した時、お金がないということで仰る価格にしたのですが、その代わりに朝のお庭の掃除を頼んだんですね。すると先生は、これはボランティアだと言われたので、私は、「先生、ボランティアというのはおかしい。払えない分を体で払っていただくんです」と申し上げました。先生の中にはそういう意識が欠如している方もおられます。

(三木)

先程のお話ではあまり肯定的には聞こえま

せんでしたが、世界遺産の指定の意味はあったと思うのですが、その辺はどうでしょうか。

(松場所長)

とても意味があったと思います。私たちが一番最初にこれは？と思ったのは、県の担当者が町民を集めて世界遺産の説明をされたんです。その時、檀上から「みなさん、うかうかしている場合でないですよ。これから、どんなビジネスチャンスがこのまちに訪れるか分かりませんよ」というようなことを仰ったんです。それで私は一番に手を挙げて、世界遺産をビジネスチャンスというのは本当におかしいと怒りをぶちまけたんです。世界遺産に手を上げた時点から、大田市、いわゆる県央には何も無いから石見銀山を世界遺産にして経済振興、観光振興をとという考えだったんです。それに一番反発を感じたんです。さっきお話したように、評価されたのは銀による経済意義よりも自然との共生とか文化的背景とかまちがどうあるべきかという将来への示唆とかだという気がしました。それと、田舎を非常に否定していた地元の人たちにとって世界遺産は非常に誇りになっていましたので、ある意味良かったと思います。

世界遺産になった当時、人口 400 数十人のまちに観光バスが 1 日に 80 台来ていました。如何に大変なことかということで、その後数年は会社がつぶれると思いました。というのは、夫はこのまちを守るということで、仕事どころか、拡声器を持って駐車場に立って、「このまちの本当の良さはこういうものではない」というようなことを言い続けていました。真夏には水飲み器を 5 台ほど置いて、その横に“お気持ち箱”を置いておりました。たぶん観光客は行政がサービスで置いているんだろうくらいに思ったんでしょうが、夫はポケットマネーで備え付けていたんです。で

もその“お気持ち箱”には千円札が入っていたことがあるんです。月に水代が 5 万円くらいかかったのですが、半分以上は“お気持ち箱”で賄いました。この時は、世の中捨てたものじゃないなと思いました。一方では、自販機でジュース等を売っている地元の人からクレームがついて止めたんですが、そういう悲しい出来事もありました。

また、世界遺産になる数年前でしたか、地元のバス会社が地元の高齢者のためにといってバスを上げ始めました。私たちは世界遺産のことを知らなかったの、良いことをしてるなと思っていたのですが、世界遺産を目論んでのことだったのです。そして世界遺産になった途端に、5 分置きに狭い道を行き来するようになったんです。夫は、これを見かねて、パークアンドライド方式を提案しました。隣町に“ふれあい公園”という誰も触れ合わないような公園があるのですが、そこには大駐車場があったので、観光客さんには、そこから乗り合いバスで大森に来ていただいて、あとは銀山まで歩いてもらおうとしたんです。その当時はすごいブーイングが起こったんですが、今では良かったと言ってくれる人が圧倒的に多くなりました。

夫の誇りは、まちには一カ所も有料駐車場がないことです。観光地になると駐車場で儲けるところがありますが、夫は、このまちの品格を守ろうということを言って、大森のまちの人たちは誰一人有料駐車場を造らなかつたんですね。そういう戦いはずっとありました。だから夫は世界遺産の初めは本当に会社を潰すくらい仕事をせず、今日はどこそこの町内会へ行って説明するとか、今日はどこそこへ行くんだと言ってましたね。

その時面白かったのは、アメリカ人でメリルリンチを早期退職してロンドン大学に文化人類学の研究で留学中のジムさんという方が

論文を書くために、夫にずっとくっついて回ったんですね。それから西村先生の大学院のタイ人の留学生※は2年間、間を置いてですが通ってきて、社員寮に滞在しながらリビングヘリテージに関して800ページに及ぶ卒業論文を書いて、私にも一冊プレゼントしてくれたんです。まちの中に歓迎されて入って、みなさんから親しまれて論文ができたと素晴らしいことを書いています。このたびタイの大学の先生になったとの報告ももらいました。そうやって、海外の人であったり面白い人たちがまちに影響を与えるという不思議なことがあります。

※事務局注：パンノイ ナッタポンさん

「リビング・ヘリテージ地域における観光影響の予防策に向けた関係主体協働の展開～石見銀山地域を事例として～」(東京大学HPより)

(三木)

今でも観光バスは何十台も来るような状況でしょうか。

(松場所長)

今も来ますが、大丈夫な状況です。マナーも守って、ちゃんとガイドさんも付けて、説明を聞きながら回られています。世界遺産になった当時は、観光業者がバス1台詰め込めばいくらになるということで、降ろしては近所のスーパーに駐車して、2時間経ったらまた乗せて行くというひどい状況がありました。

夫が一番危惧したのはそのことだったので。まちが観光客に壊されてしまうんじゃないかと。その準備ができていない段階で世界遺産指定は早すぎる、10年先、15年先でよいということも言ってました。しかし行政は一日でも早く指定されたいという動きをしたんですね。

(事務局)

大森は昔から大田市の一部だと思いますが、何が違うのでしょうか。

(松場所長)

そうなのですが、私が行って不思議に思ったのは、そこに住む人は一つの独立国家みたいな意識があって、大田市民という意識はほとんどなく、大森町民だと。それは天領だった時から明治の時代になった時に「大森県」という一つの県になったんです。ほんの半年くらいですが。そういう歴史の積み重ねというか何か意識を植え付けたのではという気がします。

(大槻)

少し話は変わりますが、“阿部家”などの買い取られた家に元の家の名前を残してリスペクトされており印象深く素晴らしいと思ったのですが、権利が移った後も、元の持ち主の子や孫といった人たちが積極的に来られるとか、あるいは意識的に元の持ち主とつながるようなことをされているのかどうか。

(松場所長)

私が意識的にするよりも先方から。実は“阿部家”から外にお嫁に出られた方のお嬢さんが、当時90歳で京都の方でしたが、その方とその方のお嬢さんのご夫婦にお泊りいただきました。雑誌で“阿部家”が紹介されたことを見て、“阿部家”には子供がいなかったことで、自分が小さい頃に何年間か預けられたことがある。それで自分の故郷のように思っていて、数年前に“阿部家”のお墓参りに行ったら、家がボロボロで本当に悲しい思いをしたけれど、再生され綺麗になったと知って大変嬉しいと仰いました。また、この間は、違う“阿部家”の出身の方が来てくださったりとかし

ました。それから、今は鳥取にお住まいの方で最後に“阿部家”に住まれた方は、奥様のご主人のお墓参りのたびに寄ってくださいませ。その奥様は“阿部家”の歴史を調査することが趣味みたいな方で、その方が仰ったのは、明治の初め頃に「阿部登美」さんという私と同じ名前の方がいたが、縁があってあなた（松場登美）が来たんじゃないのと。ですから夫は、あなたはそろそろ阿部登美さんになったらどうだとか言うんです。そういうふうに目には見えないけれども歴史の中では不思議なつながりをいただいているんだなと感じます。

（大概）

親に、盆と正月以外は実家を貸していただろうと聞くと、自分たちが居る時に来てくれるのはいいと言うんですね。ハードルが一つ下がったと思ったんですが、逆に言うと、自分たちが居ない時に入られるのはまだ抵抗があるということです。自分自身も研究者としては地域の方が買ってそういうふうにしたら良いよねと言うものの、自分も係累として考えると、他人のものになってしまうと何か引っかかるようなものがあるんですね。そこがネックだなと思っていたのですが、松場さんのコンセプトが本当にしっかりしているからでしょうが、今まで家を守られた方をリスペクトして、キッチンと形に残すということは、すごく安心感を持って譲り渡せる、引き継げる。そのことが自分たちの、家の歴史を後世に残せる手段だということで、非常に納得できるなあと感じます。

（松場所長）

夫がやった仕事の一つに“田中家”というのがあります。ポロポロで近くにその家の持ち主は住んでおられますが、その家をNPO

で、私たちは別の組織を持っているのですが、そのNPOで直して、そこに社員が住んでいきます。10年後には”田中家”に戻るという形もとっています。だからいろんなやり方はあると思います。

私は母がそうだったように、知らない人でも泊めてあげるような人だから、“阿部家”が営業を始めたのは6年前ですが、母屋ができたあたりから、何の抵抗もなく、通りがかりの人をたくさん泊めてあげました。何百人にもなると思います。この間も、福井の若いカップルが来られましたが、座ったとたんに、ここはどこかで見たとあるなと思ったら、学生時代に2週間お世話になった場所だったと言うんですね。そんな例がたくさん起き始めている。

（大概）

借地権付き貸家のことだと思いますが、そういうのが父を納得させるのにいいなあと感じたんですが、それは仕組みの問題であって、仕組みだけ作ってもダメなんですね。その仕組みとともにそれを支える覚悟というかコンセプトというか、そういうのがあってこそ受け入れられているのだなあと非常に勉強になりました。

（松場所長）

私は“阿部家”をこうしたいという思いはありますが、常に考えているのは、この家が喜ぶ使い方をしたいということです。ですから一番最初に、土地に相談するとか、土地の神様と相談するとか話をしましたが、社屋を建てるにも店舗を造るにも店の前には商品を出さないし、そういうことで土地の声を聴く、家の声を聴くということをして大事にしたいと思っています。

最後に一言だけ、何かできることはないか

とさっき仰いましたが、立派な先生方があそこにはこんな素敵なおところがあるよとひとこと言ってくだされれば、大変効果があると思います。“阿部家”が来年黒字に変わる大事な年になりますので、是非よろしく願います。

(松木)

どうもありがとうございました。お呼びできてつくづく良かったなと思っています。お話にもあった、大切なもの、目に見えないものを大事にする、また当事者でないといけないということを改めて感じました。我々研究者は一般化して理論を創って、こうすれば幸せになる、上手くいくようなことを考える人種なので、どうしても構造や動きの仕組みを聞きがちですが、実は動かない部分で動いているということがよく分かりました。ではそれを受けて我々はどうするのか。一つは、それをちゃんと受け止めて自分なりの言葉で伝えていくことかなと思っています。たぶん先生方はそれぞれの視点で感じられたと思いますので、言葉に残して、あるいは学生さんたちに伝えていくことによって日本中、世界中に広げていくために一寸でもお役に立てればいいなあと思いました。

今日は、本当にありがとうございました。

3. これまでのWG活動を振り返って～委員からのメッセージ～

外部有識者を招いての講演と意見交換等これまでのWG活動について、委員からメッセージをいただきました。

徳島大学 田口太郎 委員

25年度、多忙につき活動にはまったく参加できなかったのですが、昨今考えていることについて若干の紹介をしたい。まちや地域を取り巻く新しいトレンドについて。

ここ5年ほど、私は「地域への人的支援」に関する研究・実践を行っている。もともとの発端は2008年に新潟県中越地域に設置された「地域復興支援員」の活動支援をする中で総務省が「集落支援員」を配置する、という動きが生まれた時である。当初は、「人的支援は非常に扱いが難しいため、研究が必要」という認識で研究を始めてはいたが、今日のような大々的な動きになるとは想定をしていなかった。しかし、昨年はフジテレビドラマ「遅咲きのヒマワリ」の主人公が「地域おこし協力隊」の設定となったり、各種ドキュメントでその活動が取り上げられるなど、一般学生でもその存在を認識していることである。

新しい取り組みは、現実の閉塞感を打開する目的から生まれるということを考えれば、急速な広がりや“共感を得た”ということによって歓迎されるべきことと考えられがちであるが、当初から思っていた通りこれは「非常に扱いが難しい物」である。しかし、先日総務省が発表した平成25年度の「地域おこし協力隊」設置状況（特別交付税申請ベース）では昨年から1.5倍強の増加である。更に総務省の「集落支援員」「地域おこし協力隊」に加え、農水省の「新・田舎で働きたい」も始まっており、地域への人的支援は2重3重の取り組みとなっている。

数字だけを見ればこれは取り組みの広がりやを示すもので、良いかもしれないが、なんのための「地域おこし」か、という点の議論はさほど進んでいない。結果こうした取り組みの「先進事例」は、地域をフィールドとした

「新しい取り組み」を中心としたものとなっている。

ここで、考えたいことは、地域にとって「新しい」とはなにか？さらには「新しさは必要か？」ということである。研究にしても技術にしても、とかく「新規性」は必要項目としてあげられるが、本当に「新規性」が正しいのか、という議論が抜けているのではないか。

これは地域づくりに限らず、あらゆるものについて言える。昨今の成果主義に起因する「目新しい」ものへの執着が、身の丈を無自覚化させ、「オリジナル」を「他との違い」と解釈する風潮を生む。しかし「他との違い」は相対的なものであり、絶対的な存在としての「個」の位置づけをむしろずらしてしまう可能性をはらんでいる。

今一度、我々も「オリジナル」を再定義する必要がある。地域の身の丈、地域の文脈の沿ったものであれば「オリジナル」であって、それが「個性」である。他との差別化を意識するあまり「オリジナル」や「個性」を歪めて理解するのはやめる必要がある。

地域の主役はだれか。たしかに協力隊などの取り組みによって若者が地域に入り、いきいきと暮らす様子は爽快であるが、この存在はあくまで「カンフル剤」であるのであって、主役ではない。個別の取り組みを行いながら全体を確認する。プロセス全体を見ながら現在の断面を見る。様々な視点を行き来する視座をもちながら、制度や取り組みを一步一步引いて見ていく見識を広める必要がある。

活動に参加することなく一方的で中途半端なコメントではあるが、「現場を歩く」に重きをおいたゆえのことであることとしてご理解いただきたい。

今年度は、残念ながら講演会に2度とも参加出来なかった。そのため、近年私が考えている地域活性化の方法について、論考をまとめたいと思う。

筆者は景観工学を専門とするため、景観の立場から地域を活性化させるという方法について考えてみる。まず、景観計画策定や重要文化的景観などの政策により、農村風景を保全する制度は整ってきている。しかしながら農村集落は過疎化や高齢化が進行し、それにより耕作放棄地が増えるなど、農村風景が荒廃しつつあるという現状もある。

この現状に対し、景観計画などの規制により風景を保全するというのも案としてはあるが、景観計画の「行為の制限」では、通常の農業に関する行為や、2m以下の用排水路、農道、林道の整備は除外されている。

また、行為の制限の対象になる行為であっても、意図的に行う行為のみが対象となっているため、農村の過疎化に伴う耕作放棄地等については、規制の対象外となる。人手不足による農村空間への手入れ不足という消極的な理由による風景の変化が起こっているという現状に対し、景観計画による規制は力不足であると言える。

そもそも中山間地の風景は、一次産業の姿であるため、農業などの一次産業が活性化していることが風景の保全には、もっとも有効である。

ここで参考になるのが、イタリアでこの20年ほどで活発になってきているアグリツーリズムである。これは、農村の風景とそこで採れる食材を資源に、都会の人が休暇を過ごすという観光のスタイルである。

EUでは農家への所得補償を減らして生産性を諦めさせると同時に、集約的農業から有機農業、環境保全型農業への転換、および農村観光による所得の道に対し、補助金を出す方策をとった。

生産性を向上させることに限界があるならば、農村はその他の道をとらざるを得ない。アグリツーリズムのように半農半観光の道を探るならば、農業の風景を活用しながらそこで収益を上げることが可能になるのである。逆の視点から見れば、生産効率を上げにくい中山間地では、風景の保全と地域の活性化は、密接な関係にあると言える。

風景の保全を支援するために、筆者は「風景をつくるごはん」というプロジェクトを提唱している。農村の野菜を食べることで農村風景を守ろうというプロジェクトである。

1. 基本は徳島県内産の食材
2. 選べるときはなるべく過疎地のもの
3. 出来るだけ産直市で購入
4. 調味料など難しい場合は四国内
5. 旅行先で買ったものはOK（むしろ積極的に）
6. それ以外は、有機栽培のもの（地力を落とさない）

ネーミングについても、食卓で食べるものの選び方によって、農村風景が左右されること、つまり食卓と風景がつながっていることを意識化してもらうツールとして考えた。

メニューについては、手の込んだ野菜料理ではなく、気軽につくって食べられる料理を提案することが重要であると考えます。

そのため「風景をつくるごはん」プロジェクトでは、なるべく野菜の消費を増やすべく野菜中心であることに加え、食材を単品で使うことを心がけている。野菜の数が少ないために下ごしらえの時間が短縮できるほか、冷蔵庫に半端な食材が残りにくいため、仕事の不規則で毎日継続的に料理が出来ない人でも取り組みやすいというメリットがある。

今後はこの取り組みをさらにブラッシュアップすると同時に、広める活動にも力を入れ、実質的に農村集落の収益に影響を与えるまでの取り組みに育て上げたい。

四国は、まさに「四国」である—多様性豊かな島

鳴門教育大学 近森憲助 委員

四国はまさに「四国」である。その数だけ、あるいは、それ以上の多様性がある。これが四国という小さな島の有する最大の特徴であろう。四国の4つの県は、それぞれに相對峙する地域が異なる。香川県は、瀬戸内海を挟んで中国・京阪神地方と、徳島県は紀伊水道をはさんで近畿と面している。一方高知県は、太平洋に面していて、他の3県と異なり、日本国内のどの地域にも面していない。愛媛県は、豊後水道及び瀬戸内海をはさんで九州や中国地方西部に面している。このような地理的特性は、各県の社会、経済及び文化のありように程度の差こそあれ影響を及ぼしていることは想像に難くはない。

このような視点を獲得することができたのは、西村幸夫先生の「都市の読み解き方から考えるまちづくり～四国の県庁所在地を四都物語として、その面白さに迫る」という講演を聴いたのが大きなきっかけとなっている。私は、高知県の生まれで、徳島県内に職を得てから40年近くになる。学生生活の7年間を除き、これまでの生涯のほとんどを四国の地で過ごしてきたが、四国全体のありように思いを巡らすようなことはあまりなかった。むしろ意識は常に高知のこと、徳島のことに向いていたように思う。

しかし、四国を俯瞰的に眺めてみると、例えば、交通の面でいえば、愛媛県と九州や中国地方の間には、フェリーや高速船が行きかっている。徳島県もかつてはそうであったが、鳴門及び明石の大橋の架橋により、今や神戸・大阪へは通勤さえ可能な状況にある。香川県は以前から大企業や国の四国全体を統括する出先機関があって元々中央との関係が緊密な土地柄であった。ただ、高知県だけは、他の3県とは北側を四国山地の山々でさえぎられており、京阪神への交通ということでは私の子ども時代と比べて幾分かの変化はあるにしても基本的な状況はあまり変わっていない。

また、2011年から本学の地域貢献の一つとしてユネスコスクールへの加盟促進・啓発活動にかかわっている。この啓発活動への各県の学校や教育委員会の反応は、多様である。例えば、四国でユネスコスクールに最初に加盟したのは、愛媛県新居浜市の高等学校であった。現在新居浜市では同市教育委員会の方針に沿って市内のほとんどの小中学校（計26校）の加盟に向けて準備が進められている。一方で高知県では、2011年に小学校1校が加盟したのみであり、働きかけはしてきたが、新たな加盟への動きがもう一つ感じられない。四国全体では10数校園の加盟校があることから、「なぜ高知は？」と考えこんでしまった。

そんな中、この問いへの答えは、松場登美氏の「足元の宝を見つめて暮らしを楽しむ」という講演を聴き、ほどなくして所用で新居浜市を訪れたときにふっと浮かんできた。松場氏の活動拠点である石見と新居浜市の共通性、それはいずれも「鉱山」により栄えた歴史をもっていること、そのことにより外部からのものや人を受け入れ、交渉してきた歴史を有しているということである。新居浜市がなぜ、積極的にユネスコスクールを受け入れる動きを見せているのか、秘密の一端は、ここにあるように思えてならない。その点で、高知は、やや自己完結的で外来のものを受け入れるには多少頑固な土地柄なのであろう。

今年度のWGにおける二つの講演をきっかけとして、私は、四国の社会的文化的多様性がかなり大きいこと、地域の歴史は今もなおそれぞれの地域のありよう、人々の暮らしに大きく影響を及ぼしているのだと考えるようになった。海に限界された小さな島である四国、人口も平地も少ないが、豊かな多様性に満ちている四国。このような四国としての特性をうまく生かしつつ、「四国・住みよいまちづくり」に取り組むべきであろう。

香川大学 釜床美也子 委員

四国がどのようなまちや社会になれば「住みたいまち」になると想定して研究しているか、という根本的なテーマの議論に加えて頂いた。第4回、第5回の講師の方がいずれも地域固有の歴史や文化を読み解き、活かす方法を提示されていたように、やはり単純な利便性やサービスの向上だけがその地域に住む理由にはつながらないであろうことは、多くの方が想像されている通りであろう。私の感じた「住みたいまち」のキーワードは「差別化」である。流行を追い、どこかのまちの縮小版となるのではなく、他の場所では得られない楽しみを四国のまちに見出し、創造することが重要だと思われる。それは人とのつながり、美味しい食事という身近な事柄である可能性もある。

建築計画の立場から言えば、四国の固有の文化や風景を維持・創造することだと考える。例えば、四国で最も不便と思われる場所が価値を生んでいる事例がある。重要伝統的建造物群保存地区の落合を擁する徳島県三好市周辺の山村（写真1）である。ここでは、山村の文化や風景が残っており、高松市に住む人が、週末は同市の山村で過ごすなど、四国の都市住民をも惹き付けている。距離的にも、徳島市～三好市間（80km）よりも、高松市



写真1 三好市の山村

～三好市（60km）の方が近いということもあり、県をまたがる交流が続いている。当初は見慣れた風景と考えていた四国の都市住民も、四国の山村文化が急速に失われていく中で、皮肉にもその価値が高まったと言える。また、リビングヘリテージの概念が浸透し、山村の風景を文化財として眺めるのではなく、その維持・保全に関わり、新しい文化を創造するという考えもようやく四国でも始まっている。その関わり方は、週末に通うスタイルから、実際に別荘を設けて二居住を実践している人まで様々である。交通網や情報網の整備がそれを後押しし、山村でのビジネスも可能にしている。

人口減少社会の中にあって淘汰は免れ得ないが、残された風景や文化の価値を増し、差別化を図るための支援を研究の中で実践したい。そうした土壌が多様な景観を有する四国には十分残されている。その具体的な手法であるが、先ほどの三好市を例にとれば、おそらく四国の都市住民が山村に求めるものは、復元的な伝統集落ではないと考えている。重要伝統的建造物群保存地区は別として、住空間で言えば、四国の住民がかつて目にした民芸調の空間というよりも、伝統的な古民家に現代の都市的な意匠も取り入れ、地域の伝統

技術とも融合させた新しい民家の提案が求められていると考える。そこには専門家の介入が必要で、早急に取り組むべき課題と考えている。

四国に居ながら四国の中を旅する事が少ないとも思われるが、コンパクトながらも多様な文化・景観を有する四国の特徴を活かし、都市・農村ともに個性のあるまちを点在させ、様々な個性を享受する姿が、四国における一つの「住みたいまち」像だと考えるに至った。

愛媛大学 小林真也 委員

残念な事に、今年度は、WG会合の開催日に大学内の行事等が重なり、出席は叶わなかった。そのため、後日送られてきた当日資料の拝見という方法でのみ、WGの様子をうかがい知ることになってしまった。井戸の底から眺めているようなものである。従って、WGでの議論や意見とは、ずれた雑感を陳述することになっているかもしれない。その点は、ご勘弁頂きたい。

WGに関わり強く意識したことは、地域間の多様性である。私の専門は、情報工学、通信工学である。この専門性から来ることであろうが、私自身、地域間の差をなくすことに目が行きがちであったことを、強く意識させられることとなった。

特徴をより多く持っている事が魅力的であろうか。特徴を数多く持とうとし、持てば持つほど、魅力が損なわれるのではないか。それはあたかも、様々な波長の光を集めると白色となってしまうがごとく、特徴を感じられなくなってしまうのではないだろうか。何かを具備することだけが特徴では無い。他者が備えているものを持たない事、これも、特徴と言えよう。

勿論、魅力的であるかどうかは、感性によるものであるから、地域が持つ特徴と人の感性との相性は大切である。しかし、感性に多様性があるのだから、魅力をもたらす地域の特徴も多様性を持たなければならない。いや、多様性を残さないといけないと言った方がよいであろう。

このような事を考えると、四国の魅力を維持し、そして、より魅力的であるためには、他者に追随するのではなく、他者との違いを活かすことにあるのかもしれない。また、四国内においても、地域間での違いを残すことを意識することが必要ではないか。「住みたいまち」には目標となる普遍的な姿はなく、多様性を鍵に考えなければならないことを、改

めて確認する機会であった。

愛媛大学 兵頭 知 委員

「四国・住みたいまちに生きる」をテーマにしたワーキンググループによる議論、そのうちの第4～5回の議論に参加させていただいた。第4回においては、「都市の読み解き方から考えるまちづくり」をテーマに西村先生にご講演していただいた。第5回においては、「足元の宝を見つめて暮らしを楽しむ」をテーマに松場先生にご講演していただいた。

そして、以上のご講演内容を中心に、将来住みたい四国について議論を行った。その議論を通して、四国に将来住むうえで、土木の学生という観点から以下二つのことが肝要であると考えた。

- (1) 多角的なインフラ整備
- (2) 地域文化を考慮したまちづくり

1つ目は、様々な視点を考慮したインフラ整備方法の検討である。例えば、道路整備に関して四国の山中の道路では、確かに車の走る台数は少ないが、そこに住んでいる人は存在する。彼らの道路に対する依存率は非常に高いものがあると考えられる。また、大都市は地下鉄が5分に1本くるなど、人が動く手段が車以外に多様にある地域であるため、車に依存せざるをえない四国のような地域を同じ目線でみるのはおかしいと考えられる。

このため、例えば四国高速道路八の字ネットワーク整備の推進など地方に目を向けた多角的なインフラ整備が必要であると考えられる。

2つ目は、四国固有の文化を考慮した魅力あふれるまちづくりを行うことである。これまで、日本における建造物については、画一されたものが多いように感じられる。例えば、大都市の駅にはどこにでも同じような駅ビルがつくられるようになっている。

しかしながら、それでは建造物に地域を匂わせるものがなく、住んでいる人自身の愛着についても薄いように感じられる。確かに、画一された建造物の方が合理的であるが、各

地域の特徴を出すことは難しいように感じられる。四国においても、例えば松山であれば、松山駅をみて、これは松山だということを連想することは難しいように感じられる。

しかし以前に比べて今は地域固有、多様そういうものを求めた土木事業が展開される時代になっていると感じられる。例えば、道後温泉の“顔”である道後温泉本館前・道後温泉駅前の道路整備が挙げられる。整備前は人・自動車・バスが錯綜していたが、整備後は車両進入禁止とし、安心してゆっくりと温泉本館を訪れることのできる空間が形成されている。このように提供する場所・住む人々にふさわしい整備が行われているか、そういう点を深く考え事業を進めることが重要であると考えられる。

以上のように、まだ社会基盤が十分に整っていないような四国をいかにして、魅力的で快適な地域に形成していくかの方法を改めて考える必要があると感じた。そして、四国に住む学生として魅力的な地域形成に寄与できるような、研究開発を目指したいと思う。



道後地区 整備後の様子
(出典：愛媛県庁HPより)

高知大学 大槻知史 委員

本委員会においては、四国の中山間地域の振興に関して、「都会から田舎に関心がある人が来ても、定住するか／しないかの1か0しか選択肢がないのが問題」であり、「都会の方が、気軽に住むように滞在する『滞住』の仕組みがあれば、都会の方の力をもっと活用できるし、そこから、地域に定住する方が生まれるかもしれない」という意見を提示していた。上記に関連して、高知市土佐山地区で、滞住を実現するための具体的な仕組みが進んでいるため、これを紹介したい。

NPO法人土佐山アカデミーが実施する「土佐山ワークステイ」事業は、ひとこと言うならば、「地域から信頼されているNPOが空き家を借りて、改装し、地域に長く滞在中で何かを始めたい方に貸し出す」というものである。

NPOが金銭的・人的コストを提供することで空き家の改修コストを捻出し、また、NPOを通じて地域で新しい活動をしたい滞住者に貸し出すことで、空き家の賃借に関する、貸し手側の不安や借り手側の煩雑さを減らす取り組みである。また、あわせて、仲介組織であるNPOが地域での人脈や活動経験を生かして地区で何かを始めようとする滞住者に対する、サポーター・コーディネーター・メンターの役割を果たすことで、安定した滞住、ひいては定住までを視野に入れた支援体制を構築していることが興味深い。

本年1月末に第一次募集（5名）を実施しており、今後、継続的な募集を予定しているとのことである。

本ケースが中山間地域の「滞住」のモデル事業になることを期待しつつ、今後も着目していきたい。

図1：土佐山ワークステイ事業の紹介ポスター (<http://tosayamaacademy.org/>)

「地域で何かしたい人」のための
滞在拠点ができました！

滞在拠点
カーシェアリング
リソースコーディネート

地域で実際に暮らしてみても、まずは自分たちの手で何かやってみる。
土佐山ワークステイは、そんなことが気軽に挑戦できる滞在の仕組みです。

新しい土佐山滞在のしくみ
土佐山ワークステイ 募集開始!!

TOSAYAMA ACADEMY

メンバー

のっけからこんなことを書くのも「なんだかなあ」と思いつつも、とりとめもないことをつらつらと書き記すことになってしまうことを、まずはお詫びしたいと思う。今年度は講師をお招きし、そのお話を聴講するという活動内容であったので、受動的に思考をするしかなかったと、言い訳をしておきたい。

小生は12月2日開催の松場登美講師「足元の宝を見つめて暮らしを楽しむ」に参加した。この場所で生きていくことの覚悟を定めること。その覚悟が場所への強い愛情を必然的に生むこと。その愛情が具体性に満ちた活動を生じしめること。結果として、場所がイキイキと輝く産業と風景が創出できた、という感動的なお話であった。ひとりの人間が覚悟を持ってある場所に生きようとする。そしてそれをやり続ける。小生も「かく在りたい」と願いつつ、高知で教鞭をとり、自宅は関西にあるといった、二股な生活をしていて、すでに場所を定めて生きる状況ではない。それゆえ「無理です」と言い切ってしまうのでは身もふたもない。そこで視点を変えて考えてみたい。

私事で恐縮だが、小生は専門が建築設計である。建築する舞台がインド、アフリカ、中東、東南アジアなど。それぞれの地域は被災、貧困といった深刻な問題を抱えた場所である。ここでもやはり、一つの場所に定まっていない。しかし、場所を定めることができないという条件をしっかりと受け止めつつ、問題多き場所にイキイキとした風景が展開されることがいかに可能かということ、建築を通して考えてきた。結論からいうと、その建築が今後そこで展開する活動の核にならねばならないこと。そのためには「世界の中心」としてのシンボル性を備えねばならない（被災や貧困といった「壊れた世界」では、中心を定めることが何より大切なのだ）。そして、それを計画した建築家がある場から去ったあとも、

地の人が自立的に活動を続けるためには、その建築工法が、現地で展開可能なものでなければならない。また、これまでの歴史を継承していき、なおかつ未来へつなげるためには、現地にある材料と工法を適切に採用しつつも、外部の人間が来たからこそ、知り得る新しい技術と混交させていくという配慮も必要である。また、建設時はその現場に常駐するということも大切である。現地の人の潜在的な願いを見極めるために必須なのだ。こんなことを心がけながら、各地に新たな核を作り、その後は現地で自立的にそれぞれの豊かな展開を示す結果を得ている。その意味では場所をさだめてはいないが、建築を通じた場所の再生ということで一定以上の成果をあげてきた。ただ、それが可能だったのは現地の人々が壊れた世界に身を置きながらも、そこで生き抜いていくことに強烈な覚悟があったこと。そしてその地の未来を思う曾長の存在があったことがとても大きい。そして、この条件が、現在の日本では最も希薄なのだ。それゆえ、同じことを日本で展開可能かという、これはとても心もとないことになってしまう。

では、大学を活用する、という話が残される。ある地域に継続的に通い、そこで可能なことを粘り強くやるシステムをつくることだ。大学研究室はなくなりほしないので人はかわれども、更新していける。ただ、どうもこの手の活動を「大学時代のよき思い出」としてだけとらえ、就職やその先は別問題としている学生が多い。もし、この最もノーマルで有効そうな策が本当に有効に働くには、それを経験ではなく、人生としてそこで生きようとする学生が生まれることだと思う。では、それが可能であるためには、何が必要なのか？やはり悩みは尽きない。

当WG検討会は、地域に関わる研究者の人們がそもそもどういう社会を想定して研究をしているかについて、明示的に考えたり、議論したりすることが少ないのではないかと、しかし、それはこれからの時代に重要なことではないかという問題意識によって立案されたものであると聞いている。

自然科学の分野であろうと、社会科学の分野であろうと、研究は価値観を抜きにしては開始することすらできない。しかも、地域をフィールドとして研究する場合、どのような人を対象とするか、またその人とどのように会話をして話を紡ぎ出してもらうかは、最終的には研究者の価値観に決定的に依存する。その半面、研究者が成果を発表するときは、一定の客観性が求められる。その結果、私も含めて、研究者は一見客観的に見えるデータや分析結果を通じて間接的に自分の価値観を滲みださせるという習慣がついてくるように思われる。

そのような習慣の中にある私にとって、社会の望ましい形を明示的に議論することが求められるこのWGの試みは、非常に新鮮で貴重なものであった。

その思いを特に強く感じさせてくれたのが、第5回のWG検討会であった。この回は、石見銀山生活文化研究所の松場登美所長を迎えての講演と意見交換であった。同研究所が拠点とするのは、山奥の谷あいの一筋にある、人口四百人余りの場所である。松場氏の幼少期から始まって、現在に至るまでのライフストーリーに織り交ぜる形で、どのような思いでどのように石見の歴史文化を尊重したビジネスを続けてこられたのかについての話を聞くことができた。特にドイツの建築家の「日本人はダイヤモンドを捨てて砂利を拾っている」という言葉を引用しながら、我が国が培ってきた伝統を現代の暮らしの中に溶け込ませようとすることをビジネスの中で実践され

ている松場氏の取り組みは、私自身、個人的に非常に強く惹かれるものであった。また、それと同時に、研究者にとっても、自身の価値観を抑えてデータに語らせようとするモードと、自身の価値観を全面に押し出すモードとを、柔軟に切り替え使い分け、それらが相乗効果を生み出すような形を実現することに意義があるのではないかと感じた。

そのようなことを念頭においてこれまでのWG検討会を振り返ったとき、反省点も見えてくる。今回の試みは、私自身にとっては非常に有益なものであったが、その半面、WG検討会として、一体誰にどのような成果を残せたのかという思いは残る。それは、参加者それぞれが持つ二つのモードが十分に連動する形をとることができなかったからではないかという気がしている。議論の場で、一般の生活者として望ましい社会のあり方についての意見を表明することはあっても、普段の研究活動の中で地域に入り、様々な人に出会って、その人生に触れて共感することを重ねる自分として意見を表明することは少なかったのではないかと、自分自身を振り返っていま感じている。

もしも今後、今回を発展させる企画があるとすれば、その点を改善していく仕組みを検討することで、より有意義なものになるのではないかと考えている。

この場を借りて、このような貴重な機会に参画させて頂いたことに、心より御礼申し上げます。

高知工科大学 佐藤 暢 委員

今年度から本WGのメンバーに加えさせていただくことになり、第4回目（8月5日）の検討会に参加しました。都市計画がご専門である西村先生から、四国の県庁所在地や類似する都市を対象とした街並み形成の背景や経緯等を伺いました。それぞれのまちの構造は、そのまちが有する歴史や文化、風土や生活に培われたものであると同時に、そこで暮らし、業を営む人々の考え方が色濃く反映されていることをあらためて認識しました。とくに四国の県庁所在地は、いずれも戦国時代に基本的構成ができたこと、中心市街地は回遊性に富んでいることなど共通した特色がある一方で、まちの構造はそれぞれに異なる特徴があり、それがまちの魅力にもなっているとのお話は印象的でした。そしてそこには、それぞれのまちに暮らす人々の地域性や県民性などとも関連があるのではないかと感じます。私は高知に住んでいますが、仕事や私用などで他の県庁所在地に足を運ぶ機会もあります。そのたびに、それぞれに異なる街並みや雰囲気をもたなく感じておりましたが、今回の検討会に参加したことで、その背景や経緯の一端を理解することができました。

第5回目（12月2日）のWGについては、残念ながら参加はかなわず、議事録を拝読いたしました。松場所長とご家族の、自らが暮らす大森町（石見銀山）への確固たる想い、そしてその想いを実現するための様々な取り組みに、たいへん感銘を受けました。「小さな経営」という経営者としての考え方が、まちづくりへの想いの根底にも共通要素として流れているように感じました。「復古創新」との表現とも重ねますと、そこには昨今いわゆる「草の根イノベーション」の考え方にも通ずるものがあるように思います。言い知れぬご苦労や、困難も多々おありだったことと拝察推察いたします。それらをどのように克服さ

れてきたのか、いつの日か大森町を訪れ、「阿部家」に宿泊し、お話を伺うことができたらと思っています。

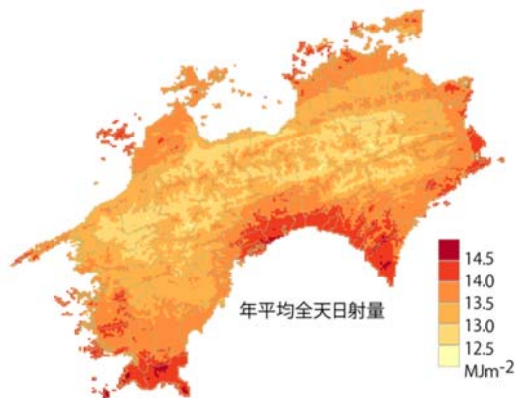
今日、地域やまちの活性化に向けて、「人が集う空間や拠点づくり」が各地で進められていることは皆様もご存じのとおりです。今後、「住みたいまちづくり」を具体化していくためには、ハードとしての「人々の集まる場づくり」に加えて、ソフトとしての「人々の関係づくり」も求められていると思います。そこで、あらためて「まち」に求められる機能を確認し、設定していくことが重要ではないかと思えます。そして、その機能を効果的に配置することで、魅力あるまちづくりを実践する。もちろん、そのためには解決すべき課題は少なくなく、そして簡単ではないと思います。そこで、分野や立場を超えて広く産学官民の関係者が集い、「住みたいまちづくり」に向けての想いを共有し、具体的な取り組みを構想するような、コミュニティを形成することも有益ではないかと考えております。そして、大学職員である一人として、「大学の地域貢献」の観点からこの問題を考えますと、このような取り組みの中で、大学にはどのような役割が地域から期待されており、どのような機能を発揮すべきなのかを明らかにしていく必要があるのではないかと思いました。今後、私も微力ながら、地域の一員としてこのような新たなコトづくりに取り組んでいきたいと思っています。

最後になりましたが、本WGの開催運営にご尽力くださいました、産総研四国センターおよび関係の皆様には、貴重な機会を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。また、今後ともよろしく願いいたします。

石見銀山生活文化研究所、松場登美代表取締役の、「先生方は“お役に立てることはありませんか”と聞くのではなく、自らが考えて提案されるべきではないか」という指摘は、研究プラットフォーム活動の本来の目標を再認識させた。その土地に住み、様々な斟酌をしながら、活力ある地域としての持続をめざして尽力されている先導者、企業経営者としての厳しさであろう。

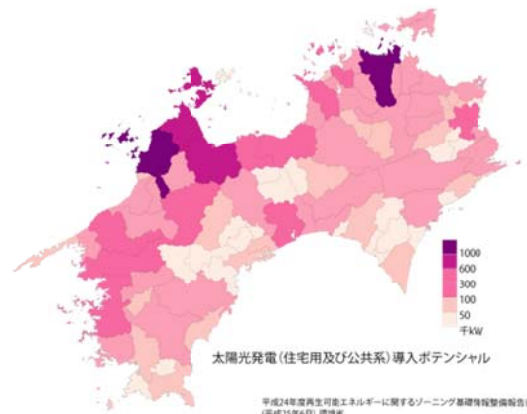
いずれの形態であれ産業（職場）無くして地域の発展はない。四国、特に中山間地の「住みたいまちに生きる」ために、地域の特長を生かす方策を、企業をはじめ関連機関に提起できる研究プラットフォームでありたい。

四国の気候は温暖で、日照時間も長い[※]。

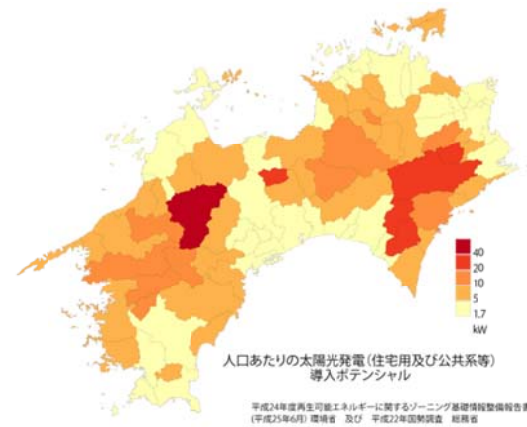


環境省による、住宅用等（住宅系建築物及び商業系建築物）及び公共系等（公共系建築物、発電所・工場・物流施設、低未利用地、耕作放棄地）を合計した太陽光発電導入ポテンシャルは次の図のようになる。四国全体で前者の合計が7,674千kW、後者が8,778千kWであり、地図にはその合計量が示されている。土地用途、法令、施行性や経済的要因などの制約が考慮されると数値はかなり低くなるが、たとえその数パーセントが活用されたとしてもエネルギー量は少なくない。

住宅用や公共系をベースにするため、都市部に高いポテンシャルが見られるが、これを人口あたりにすると様相は著しく変わり、山



間部にも大きな可能性が顕われてくる。正確な算定は難しいが、住宅用等太陽光発電の導入ポテンシャルは、四国内の区域を問わず、一戸建住宅あたり数kWと見積られる。四国全域に遍く太陽は降り注いでいる。



加えて、四万十町、四万十市、土佐清水市、西予市など四国西部には陸上風力発電の導入ポテンシャルが高い。太陽熱やバイオマスの利活用の組み合わせも含めば、四国は再生可能エネルギー導入に適する地域として特長づけられる。

研究機関はエネルギー設備やシステムの低廉化を工夫するとともに、国や自治体と協力して、一戸建住宅の耐震化もともなう導入促進に努め、これらを基盤にした産業づくりにより積極的に貢献すべきではないだろうか。

参考資料：平成24年度再生可能エネルギーに関するゾーニング基礎情報整備報告書（平成25年6月）環境省
 ※研究プラットフォームホームページ、参考資料に詳細

(参考) 四国研究プラットフォームについて

◆目的

四国の大学と産総研が、技術ポテンシャルの融合や補完などに取り組む「場（環境）」を整備し、地域社会活性化に向けて力を結集する。

◆研究プラットフォームづくりに向けた取り組み

- 平成17年 8月 四国5大学・産総研連携協力・推進協定締結
- 平成18年11月 高知工科大学・産総研連携協力・推進協定締結
- 平成21年 3月 「四国力協創産学官共同体構想」を、5大学、四国経済連合会、4県が提案（産総研四国センター、高知工科大学は協力機関として参画）
- 平成21年 6月 第15回大学・産総研四国連絡協議会（合同）において、「食と健康に関する四国力協創産学官共同体構想」の再構築で合意。
- 平成22年 9月 四国国立大学協議会において、研究プラットフォーム構想を報告・討議。高知工科大学学長に報告。「食と健康」分野で取り組むことで合意。
- 平成22年12月 四国研究プラットフォーム第1回実務者会議に報告。
- 平成23年 4月 産総研四国センターから「食と健康」研究プラットフォーム企画案を提案了承。
- 平成23年10月 四国研究プラットフォーム第2回実務者会議にて平成23年度の活動状況を報告。
- 平成24年 2月 四国国立大学協議会において、学長に報告・討議。高知工科大学学長に報告。
- 平成24年 5月 四国研究プラットフォーム第3回実務者会議開催。「食と健康」研究プラットフォームの継続と分野拡大について討議。
その後、平成24年度は、「四国・住みたいまちに生きる」をテーマに検討することについて了承。

◆四国研究プラットフォーム実務者会議メンバー（平成25年度）

徳島大学	野地 澄晴	副学長・理事（研究）
鳴門教育大学	伊藤 陽介	知的財産室副室長・教授
香川大学	早川 茂	理事（研究担当）・副学長（平成25年10月1日～）
	大平 文和	理事（評価・社会連携）（平成25年9月30日まで）
愛媛大学	矢田部 龍一	副学長・理事（社会連携・渉外）
高知大学	受田 浩之	副学長
高知工科大学	木村 良	研究本部長
産総研	松木 則夫	四国センター所長
	吉田 康一	健康工学研究部門長
	三木 啓司	上席イノベーションコーディネータ

◆平成23年度の主要な取り組み（「食と健康」）

①『提言集「研究者が語る、食と健康！」』発行

10年先の四国を展望しつつ、「人が健康に生きる」ための課題、ソリューションについて、大学（16名）及び産総研（4名）にインタビューし取りまとめ。

②3ワーキンググループでの検討

生活習慣病克服を目標に、研究開発および新ビジネス創出の視点で、「体の測定」、「心の測定」、「食の評価」の3テーマに分けてワーキンググループで議論。

③人材育成事業（「食と健康」医農工連携人材育成のための連続講座開催）

6大学、四国企業、自治体及び産総研が協働し、薬事法入門、医療機器とものづくり技術、医療現場から発信、食品衛生、植物工場、農水産物機能性成分などに関する講座を四国内各県都で合計5回開催。講師資料をテキスト集として発行。

④『四国まるごと「食と健康」イノベーション2011』による情報発信

10月1日（土）～11月30日（水）の2ヶ月間に開催される「食と健康」に関連するイベント及び各大学の研究シーズの紹介を目的に作成。産総研四国センターの「研究プラットフォーム」バナーに掲載。（平成22年度から継続）

◆平成24年度の主要な取り組み

①四国まるごと「食と健康」イノベーション2012』による情報発信

10月1日（月）～11月30日（金）の2ヶ月間に開催される「食と健康」に関連するイベント及び各大学の研究シーズの紹介を目的に作成。産総研四国センター「研究プラットフォーム」バナーに掲載。（平成22年度から継続）

②「四国・住みたいまちに生きる」ワーキンググループ活動

3回検討会を開催後、「中間報告1」としてとりまとめ。

第1回WG検討会

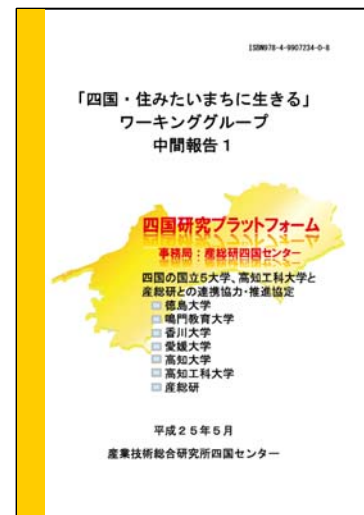
- ◆開催日：平成24年10月2日（火）
- ◆場 所：サンポートホール高松
- ◆議 事：①趣旨とメンバーのポジションペーパー
②意見交換

第2回WG検討会

- ◆開催日：平成24年10月17日（水）
- ◆場 所：サンポートホール高松
- ◆議 題：①検討会の進め方
②グループ意見交換及び全体意見交換

第3回WG検討会

- ◆開催日：平成24年12月26日（水）
- ◆場 所：サンポートホール高松
- ◆議 題：①委員による事例紹介（イタリア・ラブロ）
②意見交換



四国の6大学と産総研の四国研究プラットフォーム
「四国・住みたいまちに生きる」ワーキンググループ中間報告2

発行日 2014年(平成26年)3月31日
(編集・発行) 独立行政法人 産業技術総合研究所 四国センター (AIST Shikoku)
四国産学官連携センター
〒761-0395 香川県高松市林町2217-14
TEL : 087-869-3550 FAX : 087-869-3554
E-mail : shikoku-mail-ml@aist.go.jp
URL : <http://unit.aist.go.jp/shikoku/>

<無断で本書の記載内容を引用、転載することを禁じます。>

ISBN978-4-9907234-2-2